
ANOTHER SKY

沖田コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ANOTHER SKY

【Nコード】

N6767V

【作者名】

沖田コウ

【あらすじ】

「道具は手段でしかない。銃がそこにあったとして、トリガを引くのは、いつだって人です」

ドライな主人公と、ハードボイルドの香り漂うファンタジー！

登場人物紹介（前書き）

『ANOTHER SKY』の登場人物紹介です！
ストーリーが進むごとに随時、更新、変更を行うので
ある程度、話が進んでくると『ANOTHER SKY』を初めて
見る人にとっては、
ネタバレになる可能性があるので、ご注意ください。

一度本文を読み終えてから、想像を膨らませるために読むことをお
勧めします。

（9月10日19時、ちょっぴり追加）

登場人物紹介

■サエバ・ミズキ

身長162cm 体重50kg 年齢18歳

その昔、魔女の証や魔物との混血の証と言われていた赤毛の持ち主。顔立ちは少女のようで、声も男と言うよりは女のような声である。そのせいで、初対面の人にはよく女だと言われる。

本人は慣れたと言っているが、実はかなり嫌がっている。町のボロアパートに住んでおり、バウンティハンターを生業とするが、本人は便利屋だと言って譲らない。

ある目的のためにバウンティハンターを続けている様だが・・・。戦闘時は、体つきに不釣り合いなほど巨大な拳銃を使用する。

因みに、名前を漢字で書くと 冴羽 ^{サエバ} 瑞姫 ^{ミズキ} である。

■リーンベル・ローズヴェルト

身長？ 体重？ 年齢16歳前後 (見た目)

金髪碧眼の少女。髪はとても長く、腰に届くほどの長さ。

ミズキが仕事で探している人物。

常に分厚く大きな本を背負っている。本の内容は誰にも見せようとしない。暇さえあればその本を読んでいる。必ずこの国のどこかにいる。

それ以外の情報はない。

ミズキに渡された写真は、白黒のずいぶん古い物であるが、その容姿は全く変わっていないという。

■アーネスト・エトワール

身長176cm 体重68kg 年齢21歳

病気にかかった母の治療費のため、ミズキを襲って金を奪おうとした青年。

言葉遣いはあまりよくないが、本来は心優しい青年である。

病魔に侵された母の治療費を全額負担したミズキに、何か恩返しをしたいと思い、リーンベル・ローズヴェルトを探す旅に同行する。

ミズキに比べると、アーネストの方が主人公っぽい性格をしているかもしれません。（笑）

登場人物紹介（後書き）

前書きの一番最後にいつ『登場人物紹介』が追加されたかを記しているので、次に開くときの参考にしてください。

ある人物の手記

二百年ほど前だろうか？

長い年月を経たと言うのに、日本はその当時から全く変わっていないようだ。変わったのと言えば、国名だけ、なぜか日本国に改名した。恐らく、めまぐるしく変化（良い変化ではない。ほとんどが悪い方に変化している）していく世界情勢に、日本も変化した、ということをアピールするためではないだろうか。

他国は戦争を繰り返し、逆に小国に分裂せざるを得なかったところの方が多い。なにせ、日本国が、最も大きな国TOP10にランクインするほどののだ。一つの国の小ささが伺える。

学生の頃、世界史関連の資料（実は一般人は見てはならない極秘の物だったりする。どうして、私がそんなことが可能だったのかは聞かないでほしい）を読み漁っていた私に、衝撃を与えた。

今日の東の大陸は、百を裕に超える小国からなっている。二百年前は、それが、一つの国家Aとして成り立っていたというのだ。それも、学問、技術など、どれをとっても、世界トップクラスだったと言うではないか。今の東の大陸には、当時の面影など一つもない。これは世界全体に言えることではあるが、戦争の末（まだ、戦争が続いている場所もあるため、この表現は不適切かもしれない）技術などは昔に比べ、明らかに衰えているように見える。

そもそも、何故戦争をしなければならなかったのか。それまで、世界はある程度均衡を保っていた。それを壊してまで、何を得たかったのだろうか。できることなら、当時の首脳たちに聞いてみたい。私の推測では……いや、やめておこう。確証もないのに、それが真実であるかのように語ることを、私はあまり好まない。

戦争で疲弊しきった土地は、もう既に人が住めるような土地ではなくなっている所もある。現在、魔物と部類される未知の生物まで、発生してしまった。

原因が何であるのかは、私の専門分野ではないため、わからない。というより興味ない。

魔物と言っても、よくあるゲームの様に、突然、人を襲うということとはほとんどない。彼らは姿かたちこそ、既存の生物とは違い、恐れられてはいるが、普通の生物と何ら変わりのない生物だ。簡単に言うなら、新種。中に凶暴な種や、人を主食とする魔物もいるが、我々人間に見られる自然破壊や他の動物への破壊活動、偏食（ベジタリアン等）を考えると、極めてナチュラルなことではないかと、私は考える。

さて、長い長い前置きはこれぐらいにして、ここからが本題である。

なぜ、私がこのようなものを書こうと思ったのか、実は私自身、ちゃんと理解できていない。

あまり細かい内容は書こうと思わない。それは、この文章が誰かの手に渡ることを前提とはしていないからだ。私はこれを誰にも読ませる気などない。

だから、ここに書かれた内容を私が見て、私だけが思い出せる程度の内容であれば良いと思っている。

思えば、私がまだ若く学生だった頃、——二十年ほど前になる——に書こうとした日記とよく似ているかもしれない。

その時の日記は、三日でやめてしまった。三日坊主というやつだ。

自分で決めたことであるし、できる限りこの手記を書いていきたいと思う。毎日書く、という訳ではない。しかし、何か興味深い出来事があれば、随時、この手記に書き込んでいきたいと思う。

四月一日

まさかこんな日に、こんなことが起こるとは。

日本国の奴らが工作員を送り込んできた。人数は一人、新しい研究所員として送り込まれてきた。全く、政府の考えていることは私には理解できない。

そうだ。ここでは彼女をKとしておこう。

これは、誰にも言えない話だ。誰が言えるものかKに一目ぼれしてしまったなどと。

そして、この手記を書き始めた理由がKであることなど。

私と彼女は、いわば敵同士。相容れぬ存在なのだ。

四月六日

初めてKに話しかけた。緊張しすぎだ。

声が震えていた。三十を超えた男が、女一人にドギマギするなど、格好悪いことこの上ない。

彼女の笑顔はよかった。だが、私に光を感じさせてはくれなかった。

四月十五日

最近、Kがやたらと私に話しかけてくる。一体どういうことだ。体が触れ合うことも、増えてきた。そのたび彼女は「すみません」と言っって顔を赤らめる。

それが、私への好意の表れなのか、いわゆるハニー・トラップというもののなのか、私にはわからない。

できれば、前者であってほしいものだ。

そんな可能性など、微塵もないのだろうか。

五月五日

彼女に花を渡した。

久しぶりに地上に出て、見つけた、小さな花だった。

私は久しぶりに見た花を、大事に持ちかえり、この小さな感動を彼女と共有しようと思った。

彼女は手で口を覆い、花を見つめていた。

「これを私に？」

「え、ええ。そうです」

いまだに彼女との会話は慣れない。

胸が痛くなるのだ。

誰もこんな中年の色恋沙汰に興味ないだろう。というか、気持ち悪いだろう。

だから、私は誰にも見せない。

五月三十日

もう駄目だ。

私は駄目だ。

おかしくなりそうだ。

もう、こんな状況には耐えられない。

私は決心した。明日、Kを呼び出そう。

五月三十一日

私はすべてをKに打ち明けた。

Kが政府の工作員だということを、知っている。そして、その上でKを好きになってしまったこと。

私は殺されると思った。私はKが工作員だと言うことを知っている、ただ一人の人間なのだ。つまり、私が消えれば、いいだけの話。私は目を閉じてその時を待った。

だが、私の予想は裏切られた。

Kは泣いた。泣いてどこかへ行ってしまった。

六月一日

Kの姿が見えない。

政府に帰ったのだろうか？

六月二日

Kに呼び出された。

Kもすべてを打ち明けてくれた。

彼女の目的は私の抹殺だったらしい。ただし、その前に私と親密になり、情報を引き出せるだけ引き出せ、と言われていたようだ。つまり、ハニー・トラップそのものだった。

私は彼女に拳銃を渡した。

私を殺せ、と言った。

それで、彼女のためになるのであれば、それでいいと思った。

だが、彼女はできなかった。

「私も、貴方の事が好きになってしまったんです」

涙を流す彼女を、私は何も言わずに抱きしめた。これこそがトップであつたのならば、私は既にこの世にいないだろう。

だが、私には、なぜか彼女の涙が本物であると確信していた。

そして私は「ともに行こう」と彼女に告げた。

———大幅にページが破られており、続きがわからない。———

四月二十七日

Kに、この手記に名前を出さないようにと言われた。
あいつめ、これを見たのか・・・。

それに、差支えのありそうな部分を破って持って行かれた。出会って一年ほどたつので、かなりの枚数があつたと思うのだが・・・。
思い出とは儚い物である。

五月十二日

ある理論を思いついた。

それは、とても恐ろしいものだった。

私は一体、何を考えているのだろう。自分で考えたことではあるが、おぞましいと思う。

いや、それでも、いつかは試してみたい。

六月二日

私は、ある国の王から依頼を受けた。

ある人物を治療してほしい、とのことだった。

王から私は説明を受けた。その話はとても信じられるものではなかった。そして、その人物（話を聞いた後では『人物』と言ってよいかどうかかわからないが）は現在、死の淵に立っている。治療法自体は一応知っているようだったが、それができる医師がいなかった

らしい。

あまり難しい内容ではない。

だが、成功させるには、魔女の血が大量に必要なだった。

六月二十日

ある国の王からの連絡があった。

魔女の村を発見―――。

五日後に兵を送り込み、村を壊滅させると言った。

私は血を集めるために、その部隊に付いて行こうと思う。

六月二十五日

部隊の隊長は、国王の息子である、第二王子だった。

正直言って、あまり良い人物には思えなかった。それは、私も同じか……。

血は十分に集まった。これで、恐らく、依頼を成功させることができるだろう。

魔女の村は壊滅。それはもう、酷い物であった。地面は真っ赤に染まりあがり、家は燃やされ、目の前にはたくさんの赤が広がった。私はKと生存者がいないか探して回った。

罪悪感があったのかもしれない。自分の仕事のために、村を一つ壊滅させたのだ。

しかし、私はそこで、見つけてしまった。

これで、私の理論を確かめることができる。

『それら』を見つけた時、私の頭から罪悪感などは消えていた。

六月二十六日

ギリギリだった。だが、間に合った。

私は正しかったのだ。

いや、まだ完全に、決まったわけではない。経過が必要だ。

それまでの間は、依頼の作業に集中しよう。

六月二十八日

依頼は成功。

私は治療を成功させた。しかし、どこを間違えたのか、とんでもない副作用が生じている。

それは、私ではどうしようもない。

彼の国に任せよう。

私の依頼は、『治療する』ことだったのだ。

依然として、もう片方は目を覚まさない。一応、機械をつないでいるので、生命活動は維持できている。

まだ経過が必要か・・・。

七月一日

私に依頼を持ちかけてきた王が、依頼の品（私の治療した人物）を取りに来た。予想以上の出来だったらしく、満足しているようだ

った。

私はその人物の状態を説明。彼は、自分たちで何とかすると言った。

まだ目覚めない。私の理論は間違っていたのか……。

九月一日

目覚めた。

私は正しかった。

———続きは書かれていない。———

ある人物の手記（後書き）

世界観を、もう少しわかりやすくするために追加しました。

訳の分からない文章が続いていますが、大丈夫だったでしょうか？

もしかしたら、全ての意味がわかった人がいるかもしれませんが、「わかった」とだけ言って、そのあとは胸の内に秘めておいていただければ、と思います。

因みに、もう一度プロローグがある予定です・・・。

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

赤髪、揺れる

『ああ、なんてことをしてくれたんだ。
なぜ、俺はここにいるんだ。

一度死んだはずなのに。

どうして、こんなところにいる。

俺に、何をしろというんだ。

俺に、何ができると言うんだ。

俺は伸ばした手で、空を掻き爪った。』

街のはずれにある湖。そのすぐ隣には、小汚い喫茶店が立っていた。

最近、この周辺で、店に入る客を見ていたが、ハンターらしき人物はほとんど見られなかった。

僕は空を見上げた。

風が吹く。

肩まで伸ばした髪が揺れた。

とりあえず、入ってみようか。

僕は喫茶店のドアを開け、中に入る。かぎなれた煙草の香りがする。間接照明が多く、店の中は少し暗い。

カウンターには、五十歳ほどに見える、口髭を蓄えた男がいる。

恰好から彼がこの店のマスターだろう。

僕はマスターにゆっくりと歩み寄る。

「おい、あいつ・・・」

「ああ、赤髪だな」

「初めて見た」

「魔女だろ？」

「魔物との混血って話もあるぞ」

「それにしても、あの女。こんなところに何の用なんだ？」

他の客の会話が聞こえてくる。どれも、聞くに堪えない。もっとまともな会話はできないのだろうか。

途中、何人かに声を掛けられたが、僕はそのすべて無視して、カウンターの一番端の席に腰掛けた。

「すみません」

僕はマスターに声をかけた。

「はい。ご注文は？」

「コーヒーを一つ、それと——」

「おい、嬢ちゃんさっきから話しかけているのに——！？」

僕は体の向きを変え、真後ろから僕の肩に向かって伸された手を掴んだ。手を掴まれた男は、突然の僕の行動に驚いているようだった。

僕は首を傾けながら、にっこりと微笑む。我ながら、上出来な笑みを作れていたと思う。

男は僕の笑みに気を取られ、一瞬緊張が緩む。

その隙に、男の脛をブーツの爪先で蹴った。爪先に鉄板を仕込んだブーツは、軽い蹴りでさえ、重さがある。男は痛みのあまり、その場に声もなくうずくまる。

「お嬢ちゃん、と言いましたか？ 残念ですが、僕は男です。僕はマスターと話をしているんです。邪魔しないでもらえますか」

店中から、息を飲む気配が伝わる。

僕は椅子から立ち、男の耳元で「邪魔をするなら殺す」と囁いた。男は僕を睨んだが、何事もなかったかのように、自分のいた席に戻った。賢明な判断だと僕は思う。これ以上争っても、彼は死に、僕は店から出入り禁止を喰らいかねない。どちらの得にもならないのだ。

男は椅子に座るときもう一度僕を睨んだが、僕は微笑んで手を振ってやった。店の張りつめた空気は、失笑に変わった。

「ところで、マスター。僕はこういったものです」

僕は胸のポケットから、名刺を一枚取出し、マスターに渡した。

「便利屋？」

「ええ、ここを僕の依頼の待ち合わせ場所として、使わせていただきます」

僕はマスターに向かって微笑んだ。

今日一番の笑顔だったと思う。

赤髪、揺れる（後書き）

今回短めです。

実は『AS』の連載を始めて、かなりたってから気が付いたことですが、

この話がなければ、ちょっと大変なことが起こりかねなかったのです。

そのため、急遽、この話を作りました。

恐らく、かなり小さなことなので、誰も気が付かないはず・・・。

次話から、ちゃんと話が進みます！

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第一話 サエバ・ミズキ

街のはずれにある、湖の隣に建っている小汚い喫茶店の奥の席に、赤髪の少年が座っていた。その少年は静かな喫茶店の中、奇妙な雰囲気を感じていた。

真っ黒いコートのような衣服に包まれた細身の体に、一見して少女を思わせる顔立ち。そして何より、彼のトレードマークである赤髪。この国では、赤髪は、ほとんどお目にかかれない、とても珍しい髪の色だった。その赤髪を、彼は肩まで伸ばし、後ろで一つに束ねていた。

喫茶店のマスターや常連客は、彼が男であることを知っている。彼も常連客の一人で、ある目的のためにここによくやってくるのだった。

ただ、彼が常連客であっても素性は全く知れていない。分かっていることと言えば、女ではないこと、便利屋を生業としていること。注文するのはコーヒーのみということ。

たったそれだけだった。

彼は誰かを待っているようで、もう一時間ほど前から、その席に座っていた。コーヒーを既に三杯も飲んでいたが、彼はまたコーヒーを注文した。よほど大切な待ち合わせなのだろう。

喫茶店のドアが開き、首に赤いスカーフを巻き、金属製の鞆を持った屈強そうな男が入ってきた。

彼はコーヒーを飲もうとした手を止め、その男の動作を目で追った。

男はマスターに近づき、コーヒーとフレンチトーストを二つ注文。そして、カウンターには座らずに彼の所へ歩いてきた。

「ここに座ってもよろしいですか？」

男は彼に聞いた。

「いいえ・・・」

彼はそう言ったが、男は無視して彼の正面の椅子に座った。

彼は何も言わず、冷めかけたコーヒーを飲んだ。猫舌のせいで熱いコーヒーが飲めないのだ。

彼がコーヒーを飲み終わる頃に、男のコーヒーとフレンチトーストが運ばれてきた。

彼が席を立とうとすると、男が呼び止めた。

「どうかしましたか？」

少女のようなのは顔立ちだけではなく、声も少女のようであった。何とも可愛らしく、それでいてどこか艶っぽいような声だ。

初対面であれば、必ず女だと思うだろう。

男はじっと彼を見つめた。

「僕の顔に何かついていませんか？」

「いいえ、申し訳ありません。珍しいものですから、つい・・・」

「赤髪の事ですか・・・。そうですね、昔は魔女の証だの、魔物との混血の証だのと言って、差別の対象にされてきました。それに、この街では僕以外、赤髪の人を見たことがありませんね」

彼はすっと、目を細めて男を見た。

「すみません。その様なつもりで言ったのではないのです。ええ、本当に」

男は大きさに片手を上げた。

他意はない、と言いたいのだろう。

「ところで・・・」

男が口を開く。

「外の湖にカエルがいたのですが、何匹いたかわかりますか」
「13匹です」

彼はすぐに答えた。そして、席に座りなおした。

男はフレンチトーストを頬張りながら「そうですか」と満足そうに頷いた。

「煙草を吸ってもよろしいですか？」

彼は煙草を吸うマネをしながら男に聞く。

「どうぞ、私のことはお構いなく」

それを聞いた彼は、胸のポケットから煙草を取り出し、ライターで火を点けた。

どう見ても十歳代にしか見えない彼だったが、この国には未成年者の飲酒や喫煙を禁じる法はない。

彼は煙草をうまさうに吸うと、ゆっくりと煙を吐き出した。

「あなたは、サエバさんですか？」

不意に男が口を開いた。

「ええ、そうです。サエバ・ミズキと申します」

サエバ・ミズキと名乗った彼は、男に手を差し出した。男はそれに応じ、二人は握手をした。

「意外です。あなたがサエバさんだとは・・・」

「あなたみたいに屈強な男を想像していましたか？」

「そうですね。まさか、こんなに若い娘だとは・・・。それに背が低いとは聞いていましたが、想像以上に――」

「歳は18歳。残念ながら僕は男です。それと、身長のことには気にしているので・・・」

ミズキは自分の口の前で指をクロスさせてバツ印を作った。言わないでほしい、と言う意味だ。

「おっと、これは失礼しました」

「いえ、慣れているので」

「どのことが？」

「すべて」

ミズキが若い、女に見られる、背が低いと言われる。これはよくあることなので、さすがに慣れてしまった

「それにしても、よく覚えられましたね？」

男は笑いながら言う。その時、一瞬だが、彼の口の中が見え、ミズキは嫌悪感に駆られた。

「暗号ですか？」

表情に出さずに答える。

「ええ、私がこの店に入ってから行動。そして貴方との会話。そのすべてを覚えられるとは思っていませんでした」

実は、この男こそ、ミズキが待っていた人物だったのだ。

そして、男の言う通り、男の行動を初めとする、すべては依頼主と請負人がお互いを確認するための暗号だったのだ。

もちろんその中には、男が遅れて店に入ってくる時間、ミズキが煙草を吸うタイミングなども含まれている。

「一度、この暗号よりもっと大変な暗号がありましたからね。13個の質問の答えをすべて覚えさせられました」

ミズキは笑いながら言った。

煙草が短くなったことに気が付き、火を揉み消した。

「手紙が送られてきたときは驚きました。まさか、僕にこんな高額な依頼が舞い込んでくるとは思ってもいなかったのだ」

「ええ、サエバさんは、この町のバウンティハンターの方で一番成功率が高いと聞きました」

「バウンティハンターだなんて、大層な者ではありませんよ。ただ、町の人から依頼を受けたり、モブに指定された魔物や犯罪者を狩ったりして生活しているだけです」

モブとは、人や町などに危害を加える危険な魔物や犯罪者のことで、バウンティハンターが集まる場所——酒場や喫茶店——の掲示板に依頼が書き込まれる。

そういった掲示板がある店は、国からの指定を受けている店であり、その店の従業員たちはすべて公務員が経営している。

ミズキはあまりそういった場所が好きではなく、依頼は基本個人的に受けるか、借家のボロアパートに手紙を届けてもらうようにし

ている。そして、依頼を受けに行くことはあっても、そこで飲み食いすることはほとんどなかった。

「謙遜なさらなくても大丈夫です」

「いいえ、謙遜などではありません。見た目通り僕は力も体力もありません。ただ、舞い込んでくる依頼が簡単なだけです。つまり――」

「運がいい？」

「その通り」

ミズキは指を鳴らしながら言った。

「一つ質問をよろしいですか？」

男はコーヒーを飲み干すと、そう言った。

「ええ、どうぞ」

「あなたにとって金とはなんですか？」

唐突な質問に、ミズキは困った顔をする。

「神、ではありませんね。それほどの価値はありません……。僕にとってですか、……。ああ、難しいなあ」

しばらく考えた後、ミズキは言った。

「金は力であり、正義です。少なくとも僕にとって、そしてこの国で生きていくためには、それ以上でもそれ以下でもありません……」

「なるほど。サエバさん、あなたは分かっているようにだ」

その言葉に、ミズキは自分の眉がピクリと動くのがわかった。

「では、依頼の話に入りましょうか」

男は自分の持ってきた鞆の中を探り始めた。

「その前に、僕から質問です」

「え？」

男が鞆を探るのを止めて、ミズキを見た。正確にはミズキのいた

場所を・・・。

いつの間にか男の後ろに回っていたミズキは、大口径の拳銃を男の後頭部に付きつけていた。

男の震えが、銃を通してミズキに伝わる。

「本物の依頼主はどこですか？」

今まで明るく話していた声とは一転して、氷の様に冷たい声音だった。その声から、いつでも引き金は引けるという意味まで伝わる。「今までの行動が演技だということは、既にわかっていました」

「いったい、どこから・・・!？」

「あなたがカエルの質問をした時です。その後、僕は言いましたよね？ 13個の質問の答えをすべて覚えさせられたことがある、と」

ミズキは冷たい声のまま続けた。

店の中で騒ぎが起こっているというのに、マスターや他の客は止めようともしない。

この店の中で、いや、バウンティハンターの集まる店での争い事は日常茶飯事のため、たとえケンカが起きようと死者が出ようと誰も動じはしないのだ。

「それ、今日ここで、この時間に会う予定の依頼主だったんですよ」

「もう一つ質問です」

ミズキは震える男の耳元でそっと囁いた。

「その震えも、演技ですか？」

ミズキが言い終わらないうちに、男は銃を払いのけ、ミズキにかみかかろうとした。

ミズキはバックステップでそれを躲し、男の顎を蹴り上げた。

カウンターを見事に喰らった男は床に倒れる。

その額にもう一度、拳銃を突きつけた。

「これが最後です。本物の依頼主をどこにやった？」

男は勝てないとわかったのか、今度は演技ではなく恐怖で震えだ

していた。

どこからか拍手が鳴り響く。

不審に思ったミズキは音の主を探した。

「実に見事な判断だった。申し訳ないが、その銃を下ろしていやっ
てくれないか・・・」

そこには、灰色のスーツを着た初老の男性が立っていた。

「その頼みに、僕が応える理由がありません」

ミズキは銃を男に突きつけたまま、顔だけを老人に向けて言った。
「置かれた状況を正確に判断してほしい。お願いではないんだ。こ
れは、命令だ」

静かに言った老人。その手には、いつの間にか銃が握られていた。
ミズキは銃を下ろす。

男はミズキを睨みながら立ち上がったが、彼には何もせず、老人
の隣に立った。

まだ、老人の銃はミズキを向いたままだ。

「あなたは誰ですか？」

ミズキは老人に聞いた。

「君の、本物の依頼主だ」

老人は静かに言った。

第一話 サエバ・ミズキ（後書き）

こんにちは、コウです！

『ANOTHER SKY』第一話、如何だったでしょうか？
こちらは、私が他に連載している『願い事』のように定時更新はできないと思いますが、気長に待っていただけたら嬉しいです。

いくつか物語の用語が出てきました。

現在、『ANOTHER SKY』の用語集を作ろうかどうか悩んでいます。

もし、本文の中の説明でわからないところがあれば、遠慮せずに言ってください！

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第二話 揺れる煙

三人は椅子に座りなおした。

ミズキの正面に、男と老人が座っている。

ミズキはコーヒー、老人はミルクティーを注文して、それらが運ばれてくるまで、三人は無言のままだった。

「外の湖にカエルがいたのですが、何匹いたかわかりますか」
老人が聞いた。

「13匹です」

ミズキは質問に答える。

「ウサギを何匹食べたことがありますか？」

「13匹です」

「今日、殺した虫の数は？」

「13匹です」

「この喫茶店の天井裏には、ヤモリが住んでいるようですね？」

「13匹です」

「昨日は何体の魔物を狩りましたか？」

「13匹です」

「服に猫の毛がついていますね。猫を飼っていらっしゃるのですか？」

「13匹です」

「もしかして犬も？」

「13匹です」

「それはすごい。大家族、と言ったところですか。合わせて何匹ですか？」

「13匹です」

「ここから、数キロ離れたところにある牧場で飼われている牛は？」
「13匹です」

「街に悪戯カラスがいるようなのですが、何羽いるかわかりますか？」

「13匹です」

「そのカラスを懲らしめるために鷹を放そうと考えています。何羽がよろしいでしょうか？」

「13匹です」

「昨日、夢に出てきた友人の数は？」

「13匹です」

老人は満足げに何度も頷き、ネクタイを緩めた。

「素晴らしい。さすがは彼の見込んだ男だ。では、依頼の説明をさせてもらってもよろしいですか？」

「・・・13匹です」

老人は嬉しそうに手を叩いた。

「よく、ひっかけにも、かかりませんでしたね？」

「13の質問にすべて、『13匹です』と答えろ。そして最後の質問の前には、ネクタイを緩める。そう手紙に書いてありました」

ミズキは冷静に言ったが、正直に言うのと、最後の質問の前に合図があることを覚えていなければ、危なかったかもしれない。

そして、最後の質問の時に老人が言った『彼』とは一体誰なのか。それが唯一引っかかっていた。

「試すような真似をして申し訳ありませんでした。私はジョセフ・A・アークライトと申します。この歳になると、世の中のいろいろな側面が見えてくるので、人が簡単には信じられなくなるのです」

老人は申し訳なさそうに言った。

「ええ、お気になさらず。よくあることです。それと世の中を見る目に、年齢は関係ありません」

ミズキは微笑みながら応えた。

コーヒーを飲み干したミズキは、新しい煙草に火を点けた。

「では、依頼の説明をさせていただきます。」

さっきまで、ずっと黙っていた男が口を開く。

男は胸のポケットから一枚の写真を取り出し、ミズキにそれを渡した。

かなり古い写真のようだ、白黒写真で、ミズキより少し年下のように見える少女が写っていた。

少女の髪はとても長く、腰に届くほどの長さだ。そして、その瞳には見た目の年齢からは、考えられないような憂いを帯びていた。写真をじつと見るミズキ。徐々に写真の少女に引き込まれていくような気がした。

「見とれてしまいましたか？」

ジョセフに声をかけられ、ミズキは我に返った。

「依頼は人探しということでしたよね？」

「ええ、そうです。その写真に写っている少女を探してほしいのです」

その写真に写っている、という言葉に引っかかる。

「失礼ですが、ずいぶん古い写真に見えます。この少女の容姿も変わっているのでは？」

「いいえ、彼女はその写真のままの姿です。全く写真に違いはありません」

「なぜ、そう言い切れるのですか？」

「それは最近、あえて白黒写真でとった物なのです」

「なるほど。ですが、写真の裏には、昔の日付が書かれていますよ」

「・・・っ!？」

「すみません。嘘です、鎌をかけました。どういふことか、話してもらえますか？」

「それは、あなたが知る必要のないことです・・・」

有無を言わさぬ口調だった。

ミズキは煙草の煙と一緒に溜息を吐いた。

訳あり・・・。

その言葉が頭に浮かび、今まで最高に高まっていた依頼への意欲を低下させる。

できれば、面倒な仕事は受けたくない。

しかし、それを言っただけでは便利屋稼業を止めなくてはならないので口にしたことはない。

「前金で一万ユニット、成功したら五万ユニットでどうでしょうか？」

報酬の金額を聞いたミズキは、驚きのあまり、煙を勢いよく吸い込みすぎたせいで激しく咳込んだ。

前金で一万。そして成功したら五万。

とてつもない大金だ。それに手紙に書いてあった金額の倍になっていた。

この国の物価は高く、一般人の平均月収でようやく一ヶ月ギリギリの生活ができる。そのため食糧は自給自足を余儀なくされている家庭も多く、故に略奪や強盗が頻繁に発生するほど治安が悪い。だが一万ユニットともなると、そんな国でもある程度贅沢な暮らしを二年は続けられるだろう

それが、この仕事を成功させるだけで、六万ユニットも手に入る。十二年間も何もせずに生活できるのだ。

因みに、近隣の国でも通貨性を取り扱ってはいるが、ほとんどの国が金貨や銀貨などの貴金属を使っている。

確か、聞いた話によると、他の国では金貨一枚あれば、普通の生活をすれ二年は暮らせるらしい、その金貨一枚がこの国では、二千ユニット程度にしかない。

「足りませんか？」

「・・・・・・」

ミズキは迷っていた。この仕事を受けるべきか、受けないべきか。答えを出すのを渋らせる理由は、やはり、訳ありということである。しかも、依頼主であるこの老人は、何かを隠している。

ただの人探しではないことは、既にわかっている。人探し程度にそんな大金をかける必要などないのだ。それが、例えどれだけ大切な人であったとしても。

ミズキが言ったように、この国で金は力であり正義だ。金さえあれば何でもできる。食い物を買うことができれば、日用品を買うこともできる。経歴を買うこともできれば、自分の起こした事件を揉み消すことだってできてしまう。

それなのに、ジョセフは六万ユニットという大金を僕に払うと言った。

危険な仕事であることは目に見えていた。

しかし、ミズキには果たさなければならぬ目的がある。そのためには金が必要なのだ。

「考える時間を下さい・・・」

「いいでしょう。できるだけ早くお願いします」

「なら、この煙草を吸い終わるまで・・・」

ミズキは既に半分の長さになった煙草をジョセフに見せた。

「決めました。その仕事、受けましょう」

「ありがとうございます」

「ですが、一つ条件が・・・」

「なんででしょうか？」

「前金と後金、その両方とも金額を二倍にしてください。そうしないと仕事に見合った報酬になりません。訳あり、なのでしょう？」

ミズキは悪戯っぽく微笑んだ。

ジョセフはミズキを睨んだまま黙り込む。

隣に座っていた男が立ち上がりうとしたが、ジョセフがそれを制した。

「いいでしょう、前金で二万、後金で十万払います。ただし三か月以内に彼女を見つけて、私の所へ連れてきてください。それができなければ、後金はもちろん払いません」

「わかりました。では契約成立ですね。前金は――」

「今、払いますよ」

ジョセフが言うのと、隣の男が鞆の中から札束を二つ取り出し、ミズキを睨みながら渡す。

ミズキは札の枚数を数えた。

「確かに、二万ユニットいただきました」

持ってきた魔物の革でできた鞆に札束を放り込む。

「あと、何かこの少女を探すうえで必要な情報、まあ特徴ですね・・を提供していただけますか？」

「金髪碧眼。常に分厚く大きな本を背負っています。本の内容は誰にも見せようとしません。暇さえあればその本を読んでいます。そして必ずこの国のどこかにいます」

「そう断言できる理由は？」

「お答えできません」

「名前は？」

「リーンベル・ローズヴェルト・・」

「探す為に手段は？」

「問いません」

「わかりました。では、明日にでも仕事を始めましょう」

「いいえ、この後まっすぐ家に帰って、準備をしたら、すぐに仕事

にかかってください。時間は有限ですから・・・」

「・・・ええ、わかりました。そうします」

ミズキは席を立ち、店を出ようとした。

その時、ふと見たジョセフの顔が笑みを浮かべていた。

第二話 揺れる煙（後書き）

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第三話 忘れてはならないモノ

間借りしているボロアパートに帰ったミズキは、ジョセフ老人に言われた通り仕事の準備を始めていた。

現金、寝袋、着替えを数着、飲料水、お世辞にも美味しいとは言えない携帯食料を次々と鞆の中へ詰め込む。

そして、これは使わずに済んだ方がありがたいが、愛用の巨大な拳銃と予備のマガジン。それを腰に巻いたホルスターに納めた。

前金を受け取ったはいいが、正直、こんな大金はこの仕事に使う必要がない。持ち歩いている所を見られ、強盗に襲われても困る。そう思いミズキはベッドの上に金の入った袋を放り投げた。

ミズキは胸のポケットから、ジョセフ老人に渡された一枚の写真を取り出した。

リーンベル・ローズヴェルト。

それが、写真に写っている少女の名前だ。

見た目は16歳前後。

しかし、写真はモノクロ。モノクロ写真からカラー写真に移り変わったのが、約20年前。となると、この少女は普通であれば、36歳以上ということになる。20年以上もの間、容姿が変わらない、ということはまず考えられない。

この少女が普通ではないと考えるのが、普通だった。

ミズキは溜息をついた。

この少女（少女と言ってよいのかわからないが・・・）を三か月以内に探し出し、ジョセフ老人の下へ連れて行く。

簡単に見えて、意外と骨の折れる仕事になりそうだ。

第一、彼女が大人しくミズキに付いてくるかどうか分からない。必ず国内にいるということが、せめてもの救いと言うべきか。

ただ、この国は近隣諸国と比べ、非常に大きい。

最初は小さな国だった。それが、戦争の末、他の小国を次々に吸収し、今ではこの周辺では類稀な大国となったのだ。

しかし、短い期間で領土を数倍に広げてしまったせい、物価も全く安定しておらず、治安は非常に悪い。

その国内を三か月で回らなければならない。

どう考えても、期限ぎりぎりになるだろう。

ミズキはリーンベル・ローズヴェルトの写真を胸ポケットにしまい。テーブルの上に置いてある写真を手に取った。

それは三年前に撮った写真だ。

ミズキと黒髪の少年の二人が笑顔で写っていた。写真のミズキは今よりもっと髪が長く、背中の辺りまで伸ばしていた。どこからどう見ても、少女と少年の微笑ましいツーショット写真にしか見えない。

だが、写真を持つミズキの手は徐々に力が入り、震えていた。

「この仕事が終われば、とんでもない大金が手に入る。それまで待っていてね。僕は必ず帰ってくる。そして、今度こそあいつを見つけて出すんだ・・・」

ミズキは小さな声で、写真に語りかけていた。

自分の部屋を出たミズキは、アパートの正面に停めてあるバイクに跨り、エンジンをかけた。

通りかかった人が珍しそうにバイクとミズキの両方を見る。

この国で車は貴族や王族の交通手段であり、庶民は乗ることができない。車を買うことはできるのだが、その日に食べるパンに困っている庶民には、車を買うなどということは夢のまた夢だった。

バイクも例外ではなく、非常に高価な物だ。給料のいい仕事（バウンティハンター等がそれに当たる）に就いていたとしても、かなりの金を払わないと買えない物だった。

そんなバイクに赤毛の美少女（本来は少年である）が乗っているのだ。

ミズキはそのどちらともが、珍しく見える庶民の好奇の目に晒されることになった。

「これだからバイクに乗るのは嫌なんだ・・・」

ミズキは小さく舌打ちして、バイクを発進させようとした。

その瞬間、爆音とともに背中から強い衝撃を受け、ミズキはバイク共々吹き飛ばされてしまった。

バイクの下敷きになってしまったミズキは、何とか顔を、衝撃を受けた方に向ける。

そして、その光景を見て自分の目を疑った。

ミズキの住んでいたボロアパートが炎上しているのだ。

通行人に自分の体の上に乗ったバイクを退かしてもらい、立ち上がる。

なんとか軽傷で済んだミズキは、ジョセフの言葉を思い出してい

た。

——この後まっすぐ家に帰って、準備をしたら、すぐに仕事にかかってください。——

そして、ミズキが喫茶店を出るときに見せた、あの笑み。

なるほど、そういうことだったのか……。

火事を聞きつけ、時間とともに集まってくる野次馬たちの喧騒の中、ミズキは一人で納得していた。

前金だけで、あれほどの大金をもらえたのだ。別にリーンベル・ローズヴェルトを探さなくとも、生活していくことはできるし、ジョセフ老人には見つからなかったと言えば働かなくて済む。

しかし、それではジョセフ老人が困る。

それなら、嫌でも仕事をさせるために家をなくしてしまえばいい。

ジョセフ老人は仕事をするための理由を与えたのだ。

もちろん、ジョセフ老人の言う通り、すぐ仕事に取り掛からなければ、依頼を受けた人間は死んでしまう。

恐らく、それも計算の内。

思っていたより、ジョセフ老人はかなりのやり手のようである。

感情をコントロールする術は身に着けている。アパートを爆破されたことは、ミズキにとって何の問題でもなかったし、二万ユニットが、今こうしてアパートを燃やす火を見ている間にも、どんどん

灰に変わっていることでさえ、些細なことではなかった。

——そうであるはずだった。

ミズキは雷に打たれたような感覚に襲われた。何か大切なものを忘れている。

それは何だ？

金？

鞆？

カレンダー？

日記？

地図？

どれも違う・・・！

写真、そう写真だ。

ミズキは野次馬を掻き分けながら、燃え盛るアパートに向かって走り出した。途中、野次馬たちが叫び、喚き、ミズキを止めようとする。

邪魔をするものには容赦なく、蹴りを喰らわせながら走った。

焼け焦げたドアを蹴破る。部屋の中は煙が充満していて、中に入るのは自殺行為にしか思えなかったが、ミズキは躊躇わず部屋の中に入った。

机の上に置かれた写真を見つける。幸い、端が少し焼けている程度で済んだ。

ミズキは写真を大事そうに胸ポケットにしまい。部屋の窓から飛び降りた。

着地の衝撃を、受け身を取り相殺させる。

野次馬たちから歓声が上がり、ミズキの周りに人が集まる。声をかけられたりもしたがすべて無視した。

「お姉ちゃん……」

「……?」

小さな女の子がミズキの袖を引っ張っていた。その手にはハンカチが握られている。

ミズキが女の子の目線に合わせるように、その場にしゃがむと、女の子は持っていたハンカチでミズキの顔を拭いた。ミズキを拭いたところが黒く汚れたていた。どうやら、煤が顔についていたらしい。

「ごめんね。僕はお姉ちゃんじゃなくて、お兄ちゃんなんだ。でも、ありがとう」

目をきよとんとさせた女の子の頭を撫出た後、ミズキは倒れたままのバイクに近づいた。

バイクを起こし、エンジンを掛けてみる。しかし、何度試してもエンジンが掛かる気配はなかった。

爆風で吹き飛ばされたときに、どこか壊れてしまったらしい。

仕方なく、ミズキはバイクをその場に捨て置き、リーンベル・ローズヴェルトを探す旅に出ることにした。

「待っていて、と言ったのに。一緒に旅をすることになってしまったね」

ミズキは少し嬉しそうに、胸ポケットにしまっている写真に語りかけていた。

第三話 忘れてはならないモノ（後書き）

こんにちは、コウです！

実はファンタジーの設定や世界観を本文中で表現するのがとても苦手です。

本文中で何とか説明しようとはしていますが、説明が分かりにくかったり、前の文章からの流れがおかしいと思った方は、遠慮なく言っていたけると嬉しいです！

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第四話 偽りは時に刃

公園のベンチに腰掛け、リーンベル・ローズヴェルトの写真を片手にハンバーガーを頬張るミズキ。

いつ見ても、吸い込まれそうな瞳をしている。モノクロ写真だというのに、実際の色が想像できてしまうほど、彼女の瞳は印象的だった。

見た目の年齢からは想像できないほどの憂いを帯びた瞳は、見ている者に時間を忘れさせるほどの魅力があった。

リーンベル・ローズヴェルトを探し始めて早、一か月。何の手がかりも得られない毎日が続いていた。残り時間はあと二か月。

それまでの間に、なんとかしてこの人物を連れて帰らなければ、十萬ユニットという大金を手に入れることはできない。

ミズキは溜息をついた。

警備隊に搜索願を出そうにも、この国の警備隊は全く機能していない。犯罪が起ころうと、金を渡せば見逃し、道案内を頼むのにすら金を要求する。全く、どこまでも性質の悪い話だ。

仕方なくミズキは自分の足で探している。ようやく、この国の三分の一を探し終えたところだった。

写真を胸ポケットにしまい正面を見ると、十歳前後であろう少年と少女が指を銜えて、ミズキのハンバーガーを見ていた。

普通の子供より小さな体。着ている服も継ぎ接ぎだらけだった。

一目見ただけで、近くにあるスラムの子供たちだとわかる。

まだハンバーガーは三分の一ほどこしか食べていなかったが、ミズキはそれを二人に差し出した。

「いいの？」

少年が聞く。

「お食べ。但し、――」

「但し？」

「ちゃんと二人で分けること。それと一つお願いを聞いてくれたら。君たちにもう一つずつ買ってきてあげよう」

少年と少女は、一生懸命に首を縦に振った。

「よし、じゃあここで待っていなさい」

ミズキは二人に一つずつハンバーガーを買ってきて渡す。

お腹が空いていたのであろう、二人はもの涙を浮かべながら、ハンバーガーを平らげた。

「ありがとう、お姉ちゃん」

少女が涙を流しながら言った。ミズキは鞆にしまっていたハンカチを取り出し、少女の涙を拭いてやった。

「どういたしまして。でも僕は男なんだ」

ミズキは微笑んだ。少年が首を傾げる。

「そんな可愛い顔をしているのに？」

「ありがとう。でも、可愛い顔をしているのと、性別は全く関係ないよ」

頬に手を当て、少年と同じように首を傾げながら微笑んだ。男にしては、あまりにも可愛らしいミズキの仕草に少年の顔が赤く染まる。

「それで、僕のお願いを聞いてくれるかな？」

「はい・・・」

少年はぼーっとしたまま答える。それを見た少女が少年の足を踏みつけた。

「ちょっとお嬢さん。困りますよ、そんなことしたら」

二人に頼みごとを伝え、どこかに行った後、すぐに青年が走って近づいてきた。お嬢さんと言われ、誰の事が気が付かなかったが、青年の視線はベンチに座ったままのミズキに向けられていた。

「お嬢さん？」

ミズキは自分を指さしながら言った。

「そう、お嬢さんのことだよ」

「残念ながら、僕は男です」

今日何度目かになる説明をする。

「男!？」

青年は大袈裟に驚いて見せる。

その反応にうんざりしながら、ミズキは煙草に火を点けた。

「何が困るのですか？僕は急いでいるので、手短かに話してください」
明らかにイライラしていた。

さっきの少年にサービスしすぎたのかもしれない。

深呼吸して、感情を鎮める。

「さっき、ガキどもに餌を与えたでしょう？」

「ガキども」、「餌」と言う言葉に、ミズキの眉だけが反応した。

「ええ、それが何か？」

表情一つ変えずに答えた。

「困るのですよ。飯の味を覚えて、またここにやってくる」

「別に僕は困りません」

煙を吐きながら言った。青年は煙たそうに顔の前を手で扇いだ。

「ええ、そうでしょう。ですが、私たち商売人は困るのです。スラムのガキが近くにいただけで、客が来やしない・・・」

「そうですか、気を付けます」

ミズキの表情は全く変わっていない。

ただ、ミズキが青年を相手にするとき、全く表情を変えないというのは珍しかった。

ミズキは自分の顔がどれほど少女のようで可愛らしいかを知って

いる。男性と話すときは少なからず武器としてその可愛らしさを使用するのが通常だ。

それをしないということは、それより大切な考え事をしているか、その相手にいら立っているかのどちらかしかない。

もちろん、今回の場合は後者である。

それは、この青年の放っている空気にも原因があった。

「ところで、さっきのガキとなにを話していたんです？」

「ああ、そのことです。僕はある人を探していました、その人の写真を渡していろいろな人に聞き込みをするように頼みました。そして三日後にまたここに来るようにと。警備隊は役に立ちません。大人はがめつい。となると子供しかいないでしょう？彼らに頼んで、見返りとして何かを与える。ギブ&テイクというやつです」

「なるほど、頭の良い方だ。子供は純粹です。しかし、この街の、特にスラムの子供は違います。幼いころから人を騙し、傷つけ、盗み、殺しています。三日後にここに戻ってくることはないでしょう」

「いいえ。それは可能性としてはあり得ますが、ほんの僅かです」

ミズキは青年を馬鹿にするように言った。

青年が顔をしかめる。

「なぜ、そう言い切れるのです」

「彼らからは、純粹な『匂い』しかしませんでした。例えるなら、そう。雪の様に真っ白。嘘をつくようなことはしないでしよう。あなたみたいだね・・・」

ミズキが言い終わると同時に、青年の顔色が瞬時に変わりポケットからナイフを取り出した。

「もしかして、雪を見たことがありますでしたか？」

「黙れ。金だ、金を出せ！」

青年は唾を飛ばしながら喚いた。

「雪を見たことがないから、怒ったのですか？」

ナイフを突きつけられてもミズキは至って冷静だ。顔色一つ変わっていない。

「五月蠅い！言う通りにしろ！」

ナイフを持つ青年の手は小刻みに震えていた。その手を見てミズキは目を細めた。

残りわずかな煙草を一息に吸って、煙を吐く。

「なぜ僕が金を持っていると？」

「あんなガキどもに飯を買ってやれるんだ。生活に余裕がなければできない」

「なるほど、確かに言われてみればそうですね」

「いいから、早く金を出せ。さもないと・・・」

「あなたにはできませんよ。そういう『匂い』がします」

青年が叫び声を上げミズキに突進する。ミズキはベンチから立ち上がりながら、指で煙草を男に向かって弾いた。

煙草が青年の額に命中し、僅かに怯んだ青年のスピードが落ちる。時間にすればコンマ数秒、ミズキへの到達が遅れる程度だっただろう。

だが、ミズキにはそのコンマ数秒で十分だった。

青年のナイフを構えた手を横に蹴りナイフを弾き落とす。

一瞬、蹴られた痛みには怯む青年だが、すぐにミズキに殴り掛かった。

顔面すれすれのところで青年の拳を躲し、腹を膝で蹴り上げた。痛みを腹を折る青年の後ろに回り込み、ミズキは彼の腕を捻り上げる。

青年は痛み顔をしめる。

青年の動きを封じたミズキは、腰のホルスターから拳銃を抜き、彼に見せた。

「こんなに大きな銃で撃たれたらどうなと思います？一発で頭の半分は吹き飛ばせますよ？」

彼の目には恐怖が宿り、死への恐れと、生への執着が見え始めていた。

「わ、悪かった。もう、何もしない。だから、命だけは・・・！」

「僕から金を奪おうとした次は、命乞いですか。都合がよすぎると
思いませんか？」

「頼む。命だけは・・・」

彼の目からは涙が溢れる。

「なにか理由があるなら聞きましょう」

ミズキは銃を突きつけたまま、静かに言った。

「母親が病気なんだ。医者に診てもらおう金が必要で・・・」

「ずいぶんありきたりですね・・・」

「嘘じゃない！」

「誰が嘘と言いましたか？僕はありきたりと言っただけです」

「・・・？」

彼の顔がミズキの方へ向けられる。

「信じて、くれるのか？」

「あなたの母親に会わせてください。そうすれば、本当かどうか分
かります」

ミズキは銃をホルスターに納め、彼が立ち上がるのに手を貸した。

「僕はサエバ・ミズキと申します。名前は？」

ミズキが聞いた。

「名前？」

「そう、お互い呼び合う時に知らないと不便でしょう」

彼は納得したように頷いた。

「アーネスト・エトワールだ」

「そうですか。よろしく、アーネスト・・・」

第四話 偽りは時に刃（後書き）

今回はポツとでのアーネストと、

これまた、ポツでのミズキの不思議な力が出てきました。

ミズキの不思議な力については、また後々。

それにしても、リーネルはまだ登場しないのだろうか・・・。

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第五話 便利屋稼業

結果から先に言うと、青年アーネスト・エトワールの言葉に嘘はなかった。

彼の母は、病の床に臥していた。

ミズキがそっと近づくと目だけをうつすらと開けた。

「すみません。起こしてしまいました」
頭を下げる。

「どなたかしら？」

弱々しい声で彼女は言った。

「アーネスト君の友人です」

隣のアーネストが険しい表情をする。それを横目で見たミズキは、彼女に見えないようにアーネストの腿を抓った。

「何を!？」

「話を僕に合わせてください」

小声で言った。

「まあ、アーネストにこんなに可愛らしいお友達が……。アーネスト、なぜ今まで紹介してくれなかったの？」

「母さん。こいつこんな顔はしているけど男だよ」

彼女は「まあ……。」、と目を見開く。

ミズキは笑顔で返した。

「初めまして、サエバ・ミズキと申します」

「アーネストの母です。すみません、ベッドの上からで……。今、飲み物を」

彼女はベッドから起き上がろうとするが、苦痛で顔をしかめる。そして、大きく咳き込む。アーネストが駆け寄った。

「大丈夫です。どうぞ、お構いなく」

「すみません……。アーネスト、何か飲み物をお出しなさい」
アーネストは無言で、隣の部屋に向かった。

ミズキは煙草が吸いたくなってきた。普段なら、そこにいる人に断りを入れてから吸うのだが、今は病人の前。さすがに我慢することにした。

それに、吸いたいときに吸えなくても、何の問題もなかった。

「あの子が、迷惑を掛けたりはしていませんか？」

「ええ、何も。それどころか、彼にはいつもお世話になっています」

ミズキは微笑んだ。

もちろん、会ったのが今日初めてで、突然襲ってきたことは伏せておく。

「私が言うのも何ですが、あの子は口が悪いからよく誤解されがちですが、根はとてもしいい子なんです。私も————」

話している途中で彼女は、また大きくせき込んだ。その様子をミズキはじっと見ている。咳が止んでから、ミズキは口を開いた。

「失礼ですが。病気の方は……」

「数週間前にかかったのだと思います。熱と、咳が少しあるだけです。放っておけば治ると思います」

苦しそうにしながらも、彼女は笑顔で答えた。

「少し？それにしても、ずいぶん苦しそうに見えます。それに、彼も気付いていますよ」

ミズキの言葉に、彼女の顔が伏せられる。しまった、と思った時には、既に遅かった。

ある程度の自覚は彼女にもあるようだ。恐らく、息子に迷惑をかけまいとしているのだろう。

「すみません。余計な口を利いてしまいました。アーネスト君を手伝ってきます」

そう言って、ミズキは隣の部屋へ移動した。

「ずいぶん酷いようですね・・・」

後ろから声を掛けられたアーネストが振り返る。ミズキが壁にもたれていた。煙草を指先で弄んでいる。

「ここでは吸うなよ」

「別に、吸おうと思って持っているわけではありません」

ミズキはポケットに煙草を戻した。実はほんの少しだけ、裁縫針で紙を刺した時にできる穴ほど僅かな気持ちだったが、煙草を吸いたいと思っていた。

「それで、酷いって？」

「病気の進行が酷いということです。放っておけば、一か月も経たずに死んでしまうでしょう」

アーネストの顔に絶望の色が浮かぶ。ミズキはそれを視界に入れないように、わざと顔を背けた。

他人のネガティブな顔を見ても気持ちの良い物ではない。

思ったことをすぐに言ってしまうこの癖のせいで、後悔したことは何度もある。そろそろ直すように努力しようか、と考えミズキだった。

「とりあえず、あなたの言っていたことが嘘ではないことがわかりました。公園での一件は見逃します」

壁から離れながら、ミズキは言った。

「よくもこの状況でそんなことを！」

アーネストはミズキに掴み掛った。ミズキは何の抵抗もなく、アーネストに捕らえられる。そして、そのままの勢いで壁に叩きつけられた。

普段のミズキには、あまり見られない行動だ。体も小さく、力もないミズキにとって、戦闘時に体の大きな相手に捕らえられるということは、即ち死を意味する。そうならないため、相手の行動を逸

速く読み、常に先手を取る。それが、ミズキの戦闘スタイルのはずだった。

アーネストが憤怒の形相でミズキを睨んでいた。対するミズキは焦りも何も感じさせない、全くの無表情だった。

「アーネスト。君は自分がやっていることの意味を理解していますか？」

「五月蠅い。今からでも遅くはないんだ。お前を殺して、金を奪う」

「僕を殺して、お母さんにはなんと説明するつもりですか？」

「そんなこと、後からでも考えられる」

襟を掴んでいたアーネストの手が素早くミズキの首に当てられた。今回も避けようと思えば避けられる速さだったが、ミズキは何の抵抗もしない。

アーネストの行動をただ冷静に見つめていた。

首を絞める力が強くなり、息ができなくなる。徐々に苦しくなり始めた。目の前は暗くなつて、意識が朦朧とする。

人生で二度目に味わう死の淵だった。

一度目は、それが『死』である、という認識さえできなかった。痛いという感覚すら消え失せ、考えることを放棄した。

ただただ目の前で起こっている惨劇を見つめ、受け入れることしかできなかった。

そう、あの頃は力がなかったのだ。

力さえあれば、あの状況を覆せたかもしれない。

過去に対する不確定な希望的観測。

では、今は力がある？

今もない？

必要ない？

仕方ない？

そんなはずはない。

だとしても、この状況を回避したところで、いったい何になる？
どうせ、一度死んでいる。

二度目に死んだって、どうってことはないのではないか？

ようやく死ねるのだ。

ようやく彼女の下へ行けるのだ。

馬鹿げた、愚かな、つまらない目的のために生きなくてすむ。

喜ばしいことではないのか。

彼女は怒るだろうか？

いや、きっと笑って許してくれるだろう。

彼女はそういう子だった。

完全に意識がなくなる直前、アーネストが首を絞めていた手を放した。

ミズキはその場に倒れこみ、盛大に咳き込みながら、体が求めるままに酸素を吸った。

「やはり、君には無理だった」

ミズキは独り言のように呟いた。

「でも、僕は殺してほしかったかもしれない」

寂しそうに続けたミズキは、呼吸を整えてから立ち上がった。

アーネストはその場に手で顔を覆い、泣き崩れてしまった。

ミズキは無言のまま、服の乱れを正す。その間もずっと目だけはアーネストを見ていた。

「母親を助けたいですか？」

ミズキは優しく問いかけた。

アーネストは泣きながら頷く。

「ならば、僕に依頼しなさい。知っている医者の中で、一番腕のいい医者を紹介しろと」

アーネストの顔が上げられた。

その目がミズキに問いかける。「できるのか」と・・・。

「僕は便利屋です」

ミズキは静かに微笑んだ。

第五話 便利屋稼業（後書き）

『ANOTHER SKY』は煙草の描写が非常に多いですね・・・。

誤解を招かないために言いますが、私は吸っていませんよ？

因みに、煙草の描写は、尊敬している作家さんの描写を参考にさせていただいています。

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第六話 意志と意思と医師

「アーネスト。この家に電話はありますか？」

「ああ、向こうの部屋にある」

アーネストは涙を拭いながら、奥の部屋を指さした。

「借りますよ」

ミズキは足早に部屋を移動し、電話を見つけるとすぐに番号を入力した。国際電話であることを確認するアナウンスが流れ、呼び出し音が鳴る。

どこに電話をしているのか気になったアーネストが、ミズキの顔を覗き込む。ミズキは口の前に人差し指を立てて、ウインクした。

「・・・カナコさん？ お久しぶりです。はい、サエバです。・・・ええ、ドクタ・ウエムラに繋いで頂けますか？」

ミズキはどこか異国の言葉を話している。そのため、アーネストにはどのような会話をしているのかわからない。かろうじて、「カナコ」と「ウエムラ」という人物の名前が聞き取れる程度だった。

受話器を耳に当てたままミズキはアーネストの方へ向いた。

「僕の手術を担当した医者です。あまり雰囲気はよろしくないのですが、僕が最も信頼——ウエムラ？ サエバです」

突然、アーネストとの会話を切り上げたミズキは、異国語を話し始めた。

「そちらではもう夜でしたか・・・。いいえ、僕ではありません。是非、ドクタに診てもらいたい患者がいます。・・・え？ できない？ ドクタ、それは約束が違います。本人の同意なしにあんな手術をしておいて、今度は契約まで破るつもりですか？」

時々、受話器から相手の声が漏れておりその声から、ミズキが電話している相手が男だとわかる。かすれた声で、ずいぶんと低音である。

「・・・ええ、別に僕はかまいませんよ。ですが、断ると言うのな

ら、それなりの手段は取らせて――、さすがはドクタ。呑み込みが早い。では、一日以内に僕の所へ来てください。・・・場所ですか？ どうせ、あの『手術』の時に発信器ぐらい埋め込んでいるのではないですか？ ・・・ええ、それぐらいわかりますよ。ドクタにとつて僕は、大事な被験者なんですから・・・。それでは、一日以内に来てくださいね。くれぐれも時間に遅れないように。遅れたら・・・わかっていますね？」

ミズキは、まだ電話の向こう側で叫んでいる声を無視して、受話器を置いた。どうやら電話が終わったらしい。

終始笑顔で話していたミズキだが、ところどころ脅迫めいたことを言っていたのは雰囲気 でわかった。そして、途中、一瞬だけ見せた寂しそうな顔がアーネストの脳裏に焼き付いていた。

「ミズキ。ウエムラというのは？」

「僕の手術を担当した医者です」

「その手術とは？」

「それは、あなたの依頼を達成する上で、何の関係もありません」
ミズキは険しい顔つきで言った。つまり、聞くな、ということだろう。

「心配しなくても、ウエムラの腕は確かです。彼に任せましょう」

アーネストの家の前に、一組の男女が立っていた。

男は、まだ40代だというのに、髪がすべて白髪だ。縁の広い眼鏡をかけて、薄汚れた白衣を着ていた。

女は、黒髪のショートヘアー。そして、男と同じように白衣を着ている。化粧も薄く、肌の感じからそれほど歳をとっていないということが予想される。恐らく20代後半だろう。

「ここか・・・？」

眠そうに眼を擦りながら、男が聞いた。

彼との電話が終わり、今が18時間23分54秒。時間には余裕で間に合った。ただ、ここに来るまでの間、一睡もしていないせいで、眠気が脅威と思えるほどに眠かった。

「ええ、この家の中でしよう」

「それにしても、カナコ君。どうしてばれてしまったのだろうか？発信器？」

カナコと呼ばれた女は、溜息をついた。そして、男を睨む。

「彼を、実験動物を見るような目で見ていたのは誰ですか？失礼ですが。彼が『手術』の後、目覚めてから生命活動が自身で維持できるとわかるまでの間、あなたは間違いなくそんな目で彼を見ていました。彼はそれに気づいていたのですよ」

「わかった。わかったから、そんな怖い顔をしないでくれ」

彼は両手を上げてひらひらとさせた。彼とカナコの間でよく使われる、彼の降参の意を表すポーズだ。

「しっかりとください。ドクタ・ウエムラ」

「私は至って冷静。常にいつも通りだよ」

ウエムラと呼ばれた男は笑いながら答えた。

「最後の言葉、意味が重複しています」

カナコはもう一度、溜息をついた。

「それでは、お邪魔させてもらおうか・・・」

玄関の扉が開く音がした。席を立ち玄関へと向かったアーネストの後をミズキは付いて行った。

玄関で、男と女が立っていた。

「カナコさん、それにウエムラ。よく来てくれました。まさか、これほど早く来られるとは思っていませんでしたよ」

ミズキが二人に駆け寄った。

「こら、用があるのは私だろう。なぜ、ついでのような言い方をする」

顔をしかめるウエムラを無視して、ミズキはアーネストに二人を紹介する。

「こちらが、ウエムラ・キヨタカ。僕の手術を担当した医者です。そして隣の方が、カナコさん。ウエムラの助手です。・・・ええと、二人はもう籍は・・・」

「ええ。おかげさまで」

ウエムラとカナコは夫婦だ。しかし、仕事の際はお互いの私情を挟まないために、ウエムラは「カナコ君」と、カナコは「ウエムラ」。または「ドクタ」とお互いのことを呼ぶ。

「サエバ。その後、体の調子はどうだ？」

ウエムラが問う。

「ええ、今のところ何ともありません」

「そうか、そうか」

ウエムラは満足そうに何度も頷く。それを見たカナコがウエムラの頬を抓った。

「それが駄目だと言ったのです」

「？　どうかしましたか？」

「いいえ。こちらの話」

カナコはウエムラの頬を放すと、ミズキに向かって微笑む。ミズキは小さな顔を横に傾けた。

「かなり病気が進行している様だな」

アーネストの母に事情を説明して、ウエムラの診察を受けてもらった。

アーネストの友人であるミズキが便利屋で、ウエムラを紹介した、ということだけを彼女に伝えた。

現在は診察を終え、彼女を除いた四人で話し合っている。

「それで、助かるのか？」

恐る恐る、アーネストが口を開く。ウエムラは突然笑い出した。

「助かるのか？ 青年よ。それは誰に対して言っているのだ？」

突然一人で笑い出したウエムラにアーネストは驚き、ミズキとカナコは呆れかえっていた。

「いや、失礼。あまりにも答えが簡単すぎる質問だったのでつい……」

ウエムラは目の端ににじみ出る涙を拭った。

「君の母は助かるよ。但し、少し言葉が違うな。……正確には、私が助ける、だな」

アーネストの顔には安堵の色が浮かぶ。ウエムラは得意げに頷いている。

「ところで、煙草は――」

ウエムラがポケットから煙草とライターを取り出しながら言った。

「ここは禁煙だ」

即答したアーネストに、肩を落とすウエムラ。その二人を見て笑う、ミズキとカナコであった。

ミズキとウエムラは一度外に出て、煙草を吸っていた。

「ところで、ドクタ」

ミズキが口を開いた。

「この国の医療設備を使うつもりですか？」

「いや、残念ながらこの国ではできない。私はこの国に友人はいな

いからね。どこの設備も借りられないだろう。となると――」

「日本国へ連れて帰る？」

「そうだ。あちらの方がどう考えても設備も整っている」

「アーネストには説明したのですか？」

「ああ、この後、すぐにするよ。急ではあるが、今日の晩には出発したい」

日本国――ウエムラ、カナコ、そしてミズキの出身国である。

周りを海で囲まれた島国で、この国と比べると物価もある程度安定している。この国で言うところの警備隊である警察の働きもそれなりに評価できる。それもあって、治安も割といい方だ。

何より、医療設備が整っており、医療技術においても恐らく世界トップクラスだということは日本国が他国に誇れることでもあった。

「ところで、サエバ。一度、お前も戻ってくる気はないのか？」

「いえ、僕にはやるべきことが残っていますので。それにまだ、ドクタに体を輪切りにされるのはごめんです」

ミズキは煙草の火を揉み消しながら言った。

「まだ、続けているのか？」

「ええ、あいつを見つけて殺すまでは・・・」

「そのための『サエバ・ミズキ』か？」

ミズキの表情が変わった。

「それは、あなたには関係ないことだ！」

ミズキは大声を出した。話を切り上げるためだ。しかし、ウエムラは表情一つ変えずに続ける。

「虚しいとは思わんかね？」

「思いません。僕はそのために生きている」

「それが虚しいと、私は言ったのだが」

二人はお互いを睨み合う。

「まあ、君がいいと言うのなら、それでいいよ」

ウエムラはまだ少し残っている煙草をその場に捨て、靴底で火を消した。

「悲しいね。そんなことをさせるために、あの手術をしたわけではないのだが」

「誰がそうしてくれと、頼みましたか！」

ミズキはウエムラの胸倉をつかむ。ミズキの方が、大分身長が低いので見上げるような形になる。

「あなたのせいで、僕は・・・！」

ミズキの頬を涙が伝う。ウエムラはその涙の行先を見つめていた。頬を伝った涙は、顎にたどり着き、そして地面に落ちた。小さな染みを地面に作った。

「悪かった。落ち着け、サエバ」

その言葉でミズキは、はっとする。

自分の頬に触れた。

指が水で濡れた。

涙が流れている。

涙を流している。

何故？

感情をコントロールすることは簡単なはずなのに、なぜか止まらない。一度大きく息を吸って、肺に留める。その間に思考を切り替え、感情をコントロールする。

簡単なはずなのに、できない。

自分らしくない、と思いながらも、流れる涙を止めることはできなかった。

一人、涙を流し続けるミズキをその場に置いて、ウエムラは家の

中に入って行った。

第六話 意志と意思と医師（後書き）

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第七話 夢と赤 違う空

目の前が赤い。

何もかもが赤い。

何の赤？

血の赤。

どうしてこんなことになってしまった？

何かが聞こえる。

女の悲鳴。

彼女の悲鳴。

助けなくては。

でも、体が動かない。

既に、腕も、足も、体と離れていた。

動けないのだった。

彼女が目の前に来た。

連れてこられた。

あの男に、彼女は服を？がれ。

男に凌辱される。

男は言う。

見ているか？

楽しいか？

それとも。

もう死んでいるのか？

男は笑っていた。

既に何も考えていなかった。

目の前の惨劇を受け入れていた。

痛いという感覚すら、既に消え失せていた。

彼女の目はこちらに向けられている。

泣いている。

助けを求めている。

ゴメンね。

体が動かないんだ。

だから、仕方ない。

君を助けることはできない。

本当にゴメンね。

男は最後に、彼女の眉間に穴をあけて帰って行った。

赤が彼女の眉間から流れる。

彼女の目は恐怖で見開かれたままだった。

それを見ていた。

すべてを見ていた。

すべてを受け入れた。

何もできなかった。

ミズキが目を覚ますと、アーネストが顔を覗き込んでいた。

ゆっくりと起き上がったミズキがアーネストの顔を抓る。

「なぜ、僕の寝顔を覗き込んでいるのですか？」

「お前がずいぶんとうなされていたから、心配して見にきたんだ」
「うなされていた？　僕が？」

額に触れると、汗が手に付いた。さっきまで寝ていたベッドを見ると、大量の寝汗を掻いていたことがわかる。

明らかに、あの夢のせいだった。

「それにしても、あんたは本当に男なのか？　なんというか、寝顔とかすごく女のようなだった」

「余計なことを言わないでください。何度も言っているように、僕は男です」

アーネストに渡されたタオルで顔を拭く。少し水で濡らしていたようで、ひんやりとして気持ちよかった。

今日は、あの少年たちと出会って三日目。出会った公園で聞き込み調査の結果を聞く約束の日だった。

「アーネスト。今、何時ですか？」

「12時40分」

アーネストが時計を見ながら答える。

「12時40分！？」

ミズキは声を上げた。

少年たちと待ち合わせをした時間は13時。あと20分しかない。今すぐ準備をしてここを出なければ間に合わなかった。

ミズキはすぐに新しい服を靴から取出し、上着を脱ごうとした。だが、背後に違和感があった。アーネストが見ていたのだ。

「男の着替えなんか見えていて、楽しいですか？」

「そんな訳あるか！」

アーネストが足早にその場を去る。それを見届けてからミズキは、いつもの黒いコートに着替えた。

鏡を見て、身だしなみを確認する。あとはいつも通り、髪をゴムで束ねるだけ。

髪をゴムで束ねようとしたが、ゴムが見つからない。

「僕の髪留めのゴムを知りませんか？」

アーネストに聞いたが返事は「知らない」の一言だった。

既に時間に余裕はなかった。仕方なく髪を束ねるのは諦め、鞆の中にでも紛れ込んだのだろう、と決めつけたミズキは、アーネストの家を後にしようとする。

「ミズキ。調査結果は？」

「帰ってきたら聞きます」

それだけを言って、ミズキは待ち合わせ場所の公園に急ぐ。肩まで伸ばした赤毛が、風で靡いていた。

アーネストの母は昨日の晩、ウエムラ達と一緒に日本国へ向かった。治療費はウエムラを脅し、半額にさせた上でミズキの全額負担という話に落ち着き、その見返りにミズキがアーネストに求めたことが、この街周辺の調査だった。

調査内容は、リーンベル・ローズヴェルトの写真（少年達に渡した物もそうだが、今回の調査のためにアーネストに渡した写真はコピーである）を街の人に見せ、どこかで見たことがないかを聞く。そして、もう一つは、おかしい事件や噂を見聞きしなかったかを街の人に聞いて回らせた。

事件や噂のことを聞いて回らせたのは、リーンベル・ローズヴェルトの特異性と依頼主であるジョセフ老人の態度を考慮してのことだった。

二十年近く容姿が変わらない。そして、人探しに、主に戦闘を仕事とするバウンティ・ハンター（ミズキ自身は便利屋と言って譲らない）を雇った。この二点から、何か事件が絡んでいてもおかしくはないと踏んだからであった。

「あ、お兄ちゃん」

少年と少女が公園のベンチに座っていた。少女がミズキに手を振った。ミズキもそれに応じ、手を振りかえした。

「ごめんね。時間に遅れて」

「ううん、僕たちもさっき、着いた所」

「それじゃあ。どんな話が聞けたか、僕に教えてくれる？」

正直な話、ミズキはあまり期待していなかった。子供たちの働きに期待していなかったのではない。この街に何らかの情報があることを期待していなかった。

だが、ミズキの期待はいい方向に裏切られることになる。

少年たちの聞き込みによると、どうやら、一週間ほど前の話だが、この街で写真とよく似た少女を見たという人が複数いた。その少女は、大きな革製の鞆を背負っており、髪は腰に届くほどの金髪だったという。彼女は何の目的もなく旅をしているようで、北の街にはどう行けばいいのかを聞いていたらしい。それ以降は誰も彼女を見かけなくなったという。

有力な情報に、ミズキの口角が意識してもいないのに少しだけ上がる。

「ありがとう。助かったよ」

ミズキは二人の頭を順番に撫でた。

「お礼に、これを・・・」

ミズキは二人に紙袋を差し出した。

「これは？」

少女が不思議そうな顔で、ミズキと紙袋を交互に見る。

「食糧だよ。ほとんどが保存食だから、日持ちする。ちゃんと、一日に食べる量を考えるんだよ」

そう言い残してミズキは公園を後にした。

「アーネスト、僕です。帰りました」
返事がない。

「アーネスト？」

ミズキは家の中を探して回った。

アーネストの母が寝ていた部屋にも、ミズキが泊まった部屋にもアーネストの姿はない。さすがに、一度も案内されていない部屋に入るのは気が引ける。

仕方なくミズキは、アーネストが現れるまで、泊まっていた部屋にしていることにした。

今日には、もう次の街へ出発する予定だ。思わぬ収穫があったせいもある。善は急げ、という言葉が確かあったはずだ。

いくら待ってもアーネストは現れない。ミズキは溜息をつきながら、ポケットから煙草を取り出し、オイルライターで火を点けた。

ベッドに座り、煙草をふかしながら、窓から覗く青空を見つめる。

雲一つない青空。

あの時とは大違い。

あの時の空は土砂降だった。

赤い空だった。

今は違う。

違う空を見ている。

それに違うのは、

空だけではない。

思考を巡らせていると、側頭部に軽い衝撃を受けた。力を全く入れていなかったミズキはそのままベッドに倒れ込む。

「ここは禁煙だ」

アーネストだった。ミズキはベッドに倒れたまま、アーネストを睨む。

「アーネスト。どこへ行っていたのですか？」

「それより早く、煙草の火を消せ」

ミズキはもう一度だけ煙草を吸い、ベッドから起き上がったあと、わざとアーネストに向かって煙を吐く。アーネストは咳き込んだ。そして、まだ長かった煙草を窓から外に捨てた。

「いったい、その荷物は何ですか？」

アーネストの足元には、大きな荷物袋が置いてあった。ミズキはそれを見て目を細める。

「あんた、人を探して旅をしているんだろう？」

「ええ、旅というより、仕事ですが」

アーネストが何を言おうとしているのかは、既に予想がついていた。そして、それに対しての反応もミズキは決めていた。

「俺も連れて行ってくれ」

「断ります」

即答だった。

きっぱりと、できるだけ拒絶の意志が伝わるように返したつもりだった。

しかし、アーネストはまだ諦めていない。

「あんたは母の命の恩人だ。それに、治療費まで全額払ってくれた。何か手伝いがしたい」

「その件なら、もう既に調査をしてもらいました。それに今後、あなたに手伝ってもらおうようなことは何もない」

「でも、それでは俺の気が収まらない」

「危険な仕事です」

「そんなことは、百も承知だ」

ミズキは溜息をついた。どうやら、梃子でも動かせそうにない。

「わかりました。好きにしてください。但し、条件があります」

ここに戻ってくる途中に買った、髪留めのゴムで髪を束ねる。アーネストが不思議そうにミズキを見る。

「絶対に僕の見ている所で死なないでくださいね。後味が悪いです

から」

ミズキは小さな顔を傾けながら微笑んだ。

第七話 夢と赤 違う空（後書き）

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第八話 ナイフと銃

「なんだそれは・・・？」

ミズキが差し出したある物に、アーネストは困惑した表情を浮かべる。

銃だ。かなり小型の物で、両手の平に収まる程度の大きさだった。アーネストが仕事に同行することを許可したミズキは、彼の調査の結果を聞くことを後回しにして、この銃を買ってきた。

「見てわかりませんか？」

「わかるさ。銃だろ」

「そうです。あなたに差し上げます」

そう言ってミズキは、アーネストに銃を差し出した。アーネストの表情は困惑したままだ。銃を受け取ろうとしない。

「どうしたのですか？」

ミズキが問う。

「銃は人を殺す道具だ」

アーネストは銃から目を背けながら言った。

「道具が人を殺す、と？」

「そうだ・・・」

「三日前は、僕にナイフを向けたり、首を絞めたりしたあなたが、何を怖がる必要があるのですか？」

「あれは・・・」

アーネストの顔が伏せられる。ミズキは冷めた目で彼を見ていた。「あれは、人を殺した感覚を自分に残すためだ。その感覚で、罪の意識を自分に持たせるために・・・」

「罪の意識を自分に持たせる？ アーネスト。君はこれから先、そんなことを考えながら、僕に付いて来るつもりだったのですか？」

「ああ。そのつもりだ」

「それならば、僕に付いて来ないでください。邪魔なだけです」

今回もミズキはきっぱりと言いつつ放った。今からでも遅くはない。そんな考えで付いて来られると、こちらが迷惑なだけだった。

アーネストの顔が驚いたように上げられる。

「背負い切れると思いますか？ 無理です。君がいくら強靱な精神を持っていたとしても」

「それでも俺は・・・」

「僕が君に出した条件を忘れたわけではありませんよね？ ついさつきの事です」

「絶対にミズキの見ている前では死なない・・・」

「そう、それです。ですが、今の君の考えだと必ず君は死にます」はつきりと言いつつ切るミズキの言葉にアーネストの顔がまた伏せられた。

「僕たちは、いつ、どこで突然襲われるかわかりません。それは魔物かもしれないし、人かもしれない。自分の命を守るため、時には相手の命を奪うこともあるでしょう。罪の意識など、持たないに限ります」

ミズキは吐き捨てるように言った。

「相手を殺さないで倒すことだって――――」

ここぞというようにアーネストは反論するが、ミズキに遮られる。

「相手を殺さずに倒すことは、ただ単純に殺すことより難しい」

聞き分けのない子供を諭す親のような目だった。

因みに、ミズキは空を見上げて言った。

「僕はこの仕事を始めてから、たくさん命を奪ってきました。ですが、罪の意識など、一度も持ったことはありません」

ミズキは声の調子を変えずに、淡々と続ける。

「僕には果たさなければならぬ目的があるからです。わかりますか？ 優先順位というやつです。因みに、君の優先順位の一歩は、

僕の前で死なないこと」

「お前の言う目的ってなんだ？ お前はなぜ、そんな風に割り切れるんだ？」

「目的を話す必要がありますか？」

アーネストの問いに厳しい表情で返す。

「その目的とやらを聞けば、俺も少しは何が正しいかわかるかもしれない」

ミズキは溜息をついた。そして、沈黙。

迷っているようだった。

長い沈黙が二人を包む。

「わかりました。君には話しておきましょう」

その前に、とミズキはアーネストの目を見た。

「いいですか、アーネスト。これが人を殺すではありません」

ミズキは銃口をアーネストに向けた。そして、「バン！」と銃を撃つ真似をした。

「人が人殺すのです。道具は手段でしかない。銃がそこにあったとして、トリガを引くのは、いつだって人です」

銃をアーネストに押し付け、ミズキは自分の銃を取り出す。

「持っていないさい。それがあれば、襲われても相手を脅して逃げることもできる。要は使い方です」

自分でも甘いことを言っていることがわかった。ミズキが空に向けて一発、弾丸を放つ。銃声が響き、肩に衝撃が伝わった。

葉莢が銃から排出される。ミズキにはそれがスローモーションに見えた。長い長い時間をかけて、回転しながら地面に落ちる。地面で跳ね返った葉莢は、アーネストの足元に転がった。

「僕の目的は、ある男に復讐を果たすことです。つまり、僕はそいつを殺す」

ミズキはあえて声の調子を変えずに言った。アーネストが息を飲

むのが伝わる。

「因みに、便利屋を営んでいる理由は金を貯めるため。その男を殺した後、僕の犯罪歴を金で揉み消すつもりです」

「何のために？」

「さあ？ ドクタ・ウエムラの貴重な実験体にされるためですかね」
ミズキはくすりと笑った。もちろん、本当はそんな理由ではない。冗談で言っただけだった。

「すまない。俺には何が正しいのか、わからない」

「別にかまいません。理解してもらおうなど、初めから思っていないから」

ミズキは空を仰ぎ見た。そして、アーネストに辛うじて聞こえる程度の声で呟いた。

「何が正しいか、正しくないかなど、人によって違います。元々、すべての人に共通して正しいことなんて、存在しないですよ・・・」

「

第八話 ナイフと銃（後書き）

今回は少し短めでした。

『ANOTHER SKY』第八話、『ナイフと銃』如何だったでしょうか？

実は元々、この『ANOTHER SKY』は、哲学的な内容を絡めた物語にしたいと考えていました。

ようやく、今回の話でそれが書けたかな、と思います。

今後もハードボイルドの香りを漂わせつつ、哲学っぽいセリフなどを増やせたら、と思います。

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第九話 捉えた目標

「ミズキ。調査結果だ」

そう言って、アーネストは紙を数枚、ミズキに渡した。受け取った調査結果にざっと目を通す。

最初の紙には、リーネル・ローズヴェルトの目撃証言。だいたいは、あの少年達の言っていたことと同じ内容だった。

違っていたのは、目撃され始めた時期とされなくなった時期だった。

どうやら、三週間前にはこの街に来ていたらしい。そして、五日前まで彼女はこの街に滞在していた。見事に行き違いのような形になってしまったらしい。

それから後の数枚は、事件や噂話のことが書かれていた。ただ、どれもただの強盗や殺人。しかも、解決されたものばかり。噂となっていたのも、低俗なもので、その昔、日本国で流行っていたらしい『学校の七不思議』とかいうものと並ぶほどであった。

ミズキは溜息をつきながら、ページをめくった。次が最後のページだ。

どうやら、他にめばしい情報は一つもなさそうだと、諦めかけていたその時、ある未解決事件のことが書かれていた。

その事件のことを全く知らなかったミズキの目はすぐに書かれた文字を追いかけて、一分とかからないうちに、その内容を読み取った。思いもよらない情報に、口角が少しだけ上がる。

事件の内容はこうだ。

三週間ほど前から、殺人事件が起きている。一週間に一度若い女が殺されているらしい。犯行は夜に行われ、殺された女は皆、処女

だったという（どうしてわかったのかは、ご想像にお任せする。被害者の知り合いがそう言ったのか。それとも駆けつけた警備部隊が下衆だったのか・・・）。死因は失血死で、死体を発見した人によると殺された女は、首に切り傷があったというが、血が現場に一滴も落ちていなかったという。あとで死体を調べると、体の中に一滴の血も残っていなかったらしい。

二人の犠牲者を出したのち、その事件はぱたりと止んだ。

そして、これは北の街から来たという旅人の話だが。最近、明らかに同一犯と見える事件が、北の街でも起きたらしい。街の若い娘は皆、夜の街を出歩こうとはしなくなったようだ。

吸血鬼の仕業だとか、魔女が儀式のために処女の血を集めている、とかいう噂も流れていた。

「アーネスト、よくやりました」

「？　　どういうことだ？」

「調査結果です。もしかして君、自分で調査していて気が付かなかったんですか？」

ミズキは目を丸くして言った。まさか、これに気が付かないとは・・・。

「よく読んでください」

そう言っ、アーネストに調査用紙を突き出す。

「リーンベル・ローズヴェルトがこの街に来たのは三週間前。そして、この事件が起き始めたのも、三週間前。それに事件が止んだのは、リーンベル・ローズヴェルトがこの街を去ってからです。そして、――――」

アーネストは、はっとした。ミズキの言っていることが理解できたのだ。

「時期が重なっている！」

「そう、その通りです。リーンベル・ローズヴェルトが北の街に移

動してから、北の街でも事件が起きた」

「つまり、何らかの形で、そのリーンベルとい少女が関わっている、と？」

ミズキは小さく頷いた。

「ええ、彼女がやったのではないとしても、少し厄介なことになりそうです」

言った言葉とは裏腹に、アーネストにはミズキが楽しんでいるように見えた。

「さて、そうとわかれれば早く準備をしないと」

ミズキが手を叩きながら言った。

「準備？ 他に何か必要な物でもあるのか？」

アーネストは不思議そうな顔をする。

「君はそんな軽装で北に行くつもりですか？ 間違いなく死にますよ？」

彼の服装は、タンクトップにシャツを羽織ったラフなものだ。だが、そんな服装で北へ向かうのは自殺行為に等しい。

「なんだ？ そんなに危険なのか？」

「危険というより、寒いんです。コート一着ぐらい持っておかないと……。僕のもう一着のコートを貸してもいいんですが、サイズが合わないだろうし……」

ミズキはアーネストを見上げた。二人の身長差は十センチ以上違う。それにミズキは少しタイトなものを好んで着るので、ミズキの服をアーネストが着ることができないのは確実だろう。

「コートなら一着持っている」

アーネストはそう言って自分の部屋からベージュのコートを取ってきた。

「じゃあ、行きましようか。北の街へ」

「寒い」

ミズキは呟いた。背を丸めて歩いていった。

「寒いと言っても、意味ないんだからやめてくれ」

アーネストはうんざりしたような表情で言った。この街に入ってから、ミズキが「寒い」と言った回数は既に二桁を超えていた。

「意味がないからこそ、言いたくなるんです」

沈黙。

「そういえば、ミズキ。初めて会ったとき『匂い』がどうか、言っていないかったか？」

「なぜ急にそんなことを？」

「何か話していないと、寒い」

「……」

ミズキは溜息をついた。

「『匂い』と言っても、実際に何かの香りがするわけではありません。そういう感覚がする、というだけの事です」

淡々と答えた。

「それで、何か『匂い』に意味はあるのか？」

「『匂い』のイメージによって、主に相手の心理状態を知ることができます。これも、何となくですけどね」

ミズキは両手に息を吐いた後、コートのポケットに入れた。

「『匂い』自体は感じる時と、感じない時があります。今は、何も感じません」

「意外と不便だな」

「ええ、でも僕はこれに頼るつもりはありませんし、感じ取れたときはラッキー程度にしか思っています」

「そういうものか」

「そういうものです」

長い時間歩き続けて、ようやく街の光が見えてきた。やはり、バイクが壊れたことは痛かった。何より、移動時間の短縮にもなるし、こんな不毛な会話を続けることもなかっただろう。

ミズキはちらりとアーネストを見た。

アーネストはようやく見えた街の光に、安堵の表情を浮かべていた。

「街に付いたら、どこかに飯を食いに行こう。もう腹が減って仕方がない」

「一時間前、携帯食料を食べたでしょう」

ミズキは溜息をつきながら言った。

「あんな不味い物で腹が満たされるか。固いし、粘土のような味にするし、お前はよくあんな物が平気で食えるな？」

「粘土を食べたことがあるんですか？」

ミズキが真面目な顔で聞いた。アーネストは顔をしかめる。

「単なる比喻だよ」

「僕も平気で食べている訳ではありません。我慢しているだけです。不味くても、ある程度は栄養も摂取できるし、腹も膨ら――――」

「ああ、腹減った・・・」

そう言ったアーネストに、ミズキは携帯食料を投げつけた。

第九話 捉えた目標（後書き）

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第十話 誰が為に雪は降る

『見渡す限りの銀世界。

誰^たが為に雪は降る。

雪が解けることはあるだろうか。

解けるとどうなるのだろう。

世界が変わって見えるかな。

寒い、寒い夜の事。

赤い、赤い地面に座る、

泣き疲れた少女が一人。

真っ黒なドレスを身に纏い、

白い雪を見つめてる。

雪なんて、

積もらず溶けてしまえばいいのに。』

ようやく到着した、北の街『ナシエル』。

今まで雪一面で、地面が見えなかった。だが、ナシエルの門をくぐった直後から、地面のタイルがはつきりと露出している。道がは

つきりと見えるようになっていたのだ。不思議に思ったミズキはタイルに触った。

仄かに暖かい。それに、今さら気が付いたが、気温も外に比べると少し高い気がする。

「すみません。その方」

ミズキは近くを歩いている老人に声をかけた。老人は振り向き笑顔を見せた。寒さのせいで鼻が赤くなっていた。

「どうしたんだい、お嬢ちゃん？」

お嬢ちゃん、という言葉に一瞬反応しかけたが、何とか堪えることに成功した。間違われるたび、訂正してはキリがない。

「街の外は雪が積もっているのに、中に入ると途端に地面が現れています。それに暖かい。この街の地面はどうなっているのですか？」

「なんだい、あんたたち二人ともナシエルは初めてかい？」

「ええ」

二人は同時に頷いた。

「ここは炭鉱都市でな。ほらあそこ、山が見えるだろう。あそこが炭鉱なんだ」

老人は街の西にある山を指さした。

「それが、何か関係しているんですか？」

「まあまあ、そう急かすな」

老人は笑った。

「あの山は昔から石炭がよく取れる。他の街にもたくさん売っているが、それ以上に余ってしまう。そこでナシエルの長が考え出したのが、この床暖房システムなのだよ」

「床暖房？」

「そう、床暖房」

老人はまるで自分の息子の自慢をするかのように語る。

「各家に石炭を無料で配給して、暖炉で一日中、炊いてもらう。そして、暖まった空気の一部が煙突ではなく、街の地下に張り巡らされている排気管を通るんだ。そして、その空気が地面を温め、雪を

溶かす。ついでに気温も少し上がる……。いや、まったく。素晴らしいシステムだよ」

ミズキはその話を楽しそうに聞いていたが、アーネストの頭は既にパンクしていた。

「地盤沈下などの心配はないんですか？」

ミズキが聞く。

「地盤沈下？ うむ、すまないが私はあまり学がないのでな。その心配に付いては全くわからない」

老人は申し訳なさそうに言った。

「ミズキ、早く飯を食おう」

アーネストが横から割り込んできた。

ミズキは猫舌だ。熱いコーヒーが飲めない。この世で二番目ぐらに好きなものののに、淹れ立てのコーヒーを飲めないのは、残念で仕方がない。ミズキは煙草を吸いながら、まだ飲める温度にまで下がらないコーヒーを見つめていた。

正面に座っているアーネストは、もう既に店のメニューを二品も平らげていた。

結局、ミズキの反対を「大丈夫」の一言で片づけたアーネストは、近くのレストランに入って行ったのだ。

店の様子はミズキの予想していた通りだった。ナシエルのバウンティ・ハンターたちが大勢いたのだ。掲示板もあり、バウンティ・ハンターの詰所になっていた。

ミズキはこのような場所が嫌いだ。騒がしすぎる。本音を言えば、入りたくもなかった。

そのため店に入ってからミズキは、頻繁に小声で毒づいていた。とはいっても、店の一番奥の席に座っている男から、視線を感じているからでもあった。

「ミズキ、まだ飲まないのか？ 冷めてしまうぞ」

遅れてコーヒートを注文したアーネストは、運ばれてきてすぐにコーヒを飲んでいた。ミズキはその様子を恨めしそうに見つめる。

「猫舌なんです。熱い物は、僕の天敵です」

「へえ」

アーネストは興味の欠片もなさそうに言った。

しばらくして、コーヒを飲み始めたミズキ。アーネストは席を立つ。

「どうしました？」

「ちょっと、トイレに行ってくる」

「気を付けてくださいね。さっきから、あの隅にいる男。僕たちを見えています」

アーネストの表情が曇る。

「『匂い』か？」

「違います。単なる洞察力です。とにかく、襲われそうになったら、僕のところでまで逃げてきてください。絶対に面倒は起こさないこと」

「わかった」

そう言って、アーネストが動き出すのと同時に、ミズキたちを見ていた男も動き出した。ミズキは気づかないふりをして、コーヒを飲む。

気づかれないように目だけで、男の動きを追った。男はアーネストとすれ違う瞬間、横目で彼を見る。だが、アーネストに何かをやる気配はなく、真っ直ぐにミズキのいる机に向かって歩いてきた。

どうやら、狙いはミズキのようだ。

ミズキは小さく舌打ちした。

アーネストが襲われても、逃げたり、ミズキが助けに入ったりすることはできる。

だが、ミズキに狙いがあるのなら、トイレに入ってしまったアーネストにはこちらの状況はわからない。つまり、アーネストがこちらに気づくまでは、逃げ出すわけにはいかないのだ。

体格や身なりから判断すると、男はバウンティ・ハンターのようなものだ。とはいっても、こういった飲食店などに来る客自体、貴族やバウンティ・ハンターのように、生活に困っていない物しかない。

男はミズキより三十センチ近く背の高い大男で、筋肉は服の上から確認できるほど発達している。着ている服もそれなりに高そうな物で、腰には彼の武器であろう剣が吊るされていた。

まともな力比べでは、ミズキの負けが見えていた。ミズキにはスピードはあっても、力と体力はない。それを補うための銃である。

「変わった髪の色をしているな。赤髪って言うんだろ？ 確か、魔女か魔物との混血だっていう噂が昔あった……。ところで今、暇かい？」

「いいえ、連れがいます・・・」

ミズキは声をかけられたが、そっけなく返した。今回も性別についての訂正はやめておいた。

「もしかして、さっきの冴えない顔をした兄ちゃん？」

「ええ・・・」

「そんなやつ放っておいて俺と一緒に来ないかい？」

男は品のない笑みを浮かべる。一瞬、ミズキはどうして、この男の笑みに品がないのかを考えた。

男はゆっくりと、ミズキの顔に手を伸ばした。

「遠慮しておきます」

ミズキは男の手を払う。

気が付くと今まであれほど騒がしかったはずの店が、今は静まりかえっている。食器の触れ合う音しか聞こえない。全員がミズキと男に注目していた。

それも、ほとんどの者が、男と同じ笑みを浮かべていた。残りの者は、ミズキに哀れみの目を向けている。どうも気に食わない目だ。「おい、見ろよ。あいつまた、女に手を出そうとしているぞ」

「あの女、変わった髪の色をしているな」

「そういえば先週は何人だった？」

「三人だ。そのうち死んだのが二人」

「毎回の^{いそ}ように殺すな？　いつ殺しているんだ？」

「行為に勤^{いそ}しんでいる最中」

「もったいねえ・・・」

「かわいそうに、あの娘も同じことをされるのか」

そんな会話が聞こえてきた。

なるほど、この男の目的はミズキの身体のようなのだ。ミズキは吐き気を覚えた。そして、理解した。この男の笑みに品がない訳を・・・。

ミズキの追い求めている『あの男』に似ているのだ。

「意外に気が強いんだな。だが、そういう方が俺の好みだ。・・・あの男、ハンターか？　貧弱そうだな。おまけに身なりも悪い。あまり稼げていないんだろう？　俺はナシエルでは名の知れたハンターでね。何が欲しい？　服？　食い物？　宝石？　欲しい物何だっ て買ってやる。もちろん、その後の事も満足させてやる。だから、俺と一緒に来い」

「ええ、間に合ってます。だから、結構です」

ミズキは答えた。何が間に合っているのか。自分で言うておいて笑いそうになってしまった。

「断った。あの女、断ったぞ」

「あいつ、またキレだすんじゃないか？」

「かわいそうに、二度目の奴の誘いを断った女で、生きていたやつはいないと言うのに」

その言葉に交じって、ミズキと男に対しての笑いが起こった。

「連れが来るので」

そう言つてミズキは席を立ち、男の真横を通り過ぎる。ミズキのあまりにもそつけない態度に、また笑いが起こる。

「貴様・・・！」

男がミズキの肩をつかんだ。

ミズキの目が見開かれる。一瞬反応が遅れた。

肩をつかまれたせいだ。

力いっぱい、男に引き寄せられる。

「今、この場で犯つてもいいんだせ！」

男がミズキの胸倉をつかみながら怒鳴る。ミズキは力なく俯いていた。

「・・・るな」

ミズキが口を開く。小さな声で聞き取れない。笑いが包んでいた店の中は、また静寂に包まれた。

「ん？」

男が不思議そうにミズキの顔を覗き込む。

「汚い手で僕の体に触るな！」

ミズキは男に怒鳴り、同時にコートの袖口に隠していたナイフで、男の腕を斬りつけた。

血が迸り、男はたまらずミズキを放した。

ミズキはさらに一歩踏み込み、後退した男の頸動脈に、ナイフの切っ先をピタリと当てた。

男の首にナイフの切っ先が徐々に埋まる。血が少し流れていた。男は恐怖に顔を歪めた。

「ミズキ！」

アーネストが、ミズキに駆け寄る。

ミズキはアーネストの姿を見ると、無言でナイフを袖口に納めた。カウンターに適当な額の金を置き、ミズキは出口へと向かう。

「どうした？ 面倒を起こすなど言ったのはお前の方だろう？」

心配そうに肩に手を置いたアーネストだったが、すぐに振り払われた。

ミズキは脈拍と息が上がっていることに気づいた。

怒ったせいだと自覚する。あれは完全に自分の不注意だった。そのせいであんな結果を招いた。ごめんなさい、と何度も謝罪の言葉を胸の内で呟いた。もちろんそれは、アーネストに向けた謝罪の言葉ではなかった。

アーネストは横目でミズキの様子を窺った。ミズキと出会って、まだ一週間もたっていない。だが、ミズキが表情を変えるときはあっても、感情をあまり表に出さないことは既に知っていた。そのミズキが今、とても憂いに満ちた表情を浮かべていた。

ミズキは雪の降る空を見上げた。

白い雪はこの空の下にいる、誰の意志も関係なく振り続けていた。

第十話 誰が為に雪は降る（後書き）

冒頭の独白のような部分ですが、私のイメージと少しズレがあったので、第九話の途中から、今回の話の冒頭に移動させました。突然の変更、申し訳ありません。

途中で『床暖房』という言葉が出てきますが、これは『ANOTHER SKY』の世界での床暖房です。実際の物とは恐らくかなり違いがあります。

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第十一話 黒のドレスに月夜の呪文

『黒いドレス
纏った子。

みんなはその子、

追いかける。

追っても無意味。

でもやめない。

追手は必死。

でも無意味。

あの子は笑う。

月夜に笑う。

笑えば響く、

可笑しいね。

』

ミズキとアーネストはあの後、宿に向かい部屋を借りていた。ミズキは部屋を借りるときに偽名を使った。

「おい、その名前」

「偽名です」

ミズキが名前を書いている時に、アーネストが小声で聞いた。
「後で面倒なことが起こってもいいようにと・・・」

ミズキは答える。

「じゃあもしかして、『サエバ・ミズキ』も偽名か？」

「それは、――」と一瞬口を閉じる。

「本名です・・・」

アーネストは気が付かなかったが、ほんのわずかな時間、ミズキは答えるのをためらった。

二人は行動しやすいという理由から、同じ部屋に泊まることにした。アーネストがベッドに座ると、ミズキが近づいてきた。

「シャワーを浴びてきます。僕が出たら、すぐに出掛けられるように、準備していてください」

「出掛ける？」

「君はここに観光で来たんですか？ 仕事です。目撃者がいるようなので、聞き込みに行きましょう」

そう言って、ミズキは着替えの入った袋を持ってバスルームに消えた。

しばらくすると、シャワーの音が聞こえ始めた。

アーネストはベッドに寝転がり、コートの内にしまっている拳銃を取り出した。様々な角度から、人を殺すための道具を見る。

ミズキから、銃を使う時にはどうすればいいかを聞かされていた。目線と銃と一緒に動かす。トリガには撃つ時以外、指をかけない。そして、撃つ時には躊躇わない。

それを実際に行動に移したとき、アーネストは人を殺す。

「できれば、使いたくはないよな」

誰もいない部屋で呟いた。

ミズキはシャワーから出る水を浴び続けていた。冷たい水を浴びても、さっきの男に触られた不快感は消えない。何度擦っても消えないのだ。消えないどころか、その不快感は癌細胞のように、徐々に広がっていた。

ミズキはしばらく、水を浴びながら俯いていた。

ミズキの視界には排水溝に流れる水が入っていた。

頬を伝う冷たい水の中に、何か温かい物が混じる。それはミズキの目から流れていた。

ミズキは顔を手で覆い、少しの間、そのままだった。

このまま体が溶けて、水と一緒に流れてしまえばいいと思った。

ミズキはバスルームから出ると、ベッドで拳銃を手に寝ていたアーネストを起こした。

アーネストは眠そうに眼を擦りながら、コートを羽織り、拳銃をしまう。

ミズキも準備は済ませていたのでコートを羽織った。前のボタンを器用に片手で閉じながら、アーネストに紙切れを渡す。

「なんだこれは？」

「今から目撃者の男性の所に行きます。それは、男性に質問する内容を書いたメモです。君が男性に質問してください」

「何で？ お前が聞けばいいんじゃないのか？」

「こんな顔をしていると、舐められてしまうんですよ」
ミズキは自分の顔を指さしながら言った。

「なるほど。ところで、今日は髪を括らないのか？」

アーネストが聞いた。

いつもミズキは髪をゴムで括っている。だが、部屋を出ようとしたミズキは、肩まで伸ばした赤髪をそのままにしていた。髪を括っていないミズキは、括っている時より、より女性的に見える。

「髪形ぐらい、僕の自由でしょう？ それとも、括っていた方がアーネストの好みですか？ 残念ですが、僕に男色の趣味はないので・・・」

ミズキは悪戯っぽく微笑んだ。

「俺だってそんな趣味はない」

アーネストは少し怒ったように言った。

一週間、事件があったときに、その場に居合わせたという男性の家を訪れた。呼び鈴を鳴らすと、すぐに痩せた男性が玄関を開けた。「突然すみません。一週間前の女性が血を抜かれて殺された事件について、お聞きしたいのですが」

「またそれか、話せることは警備隊に話した。俺は一刻も早く、あのことを忘れたいんだ」

男性はドアを閉めようとしたが、ミズキがドアにブーツの爪先を挟み込む方が先だった。それを見たアーネストが顔をしかめる。

「大丈夫。安全靴です」

ミズキはアーネストに言った。

「被害者の家族から、依頼を受けて来た者です。彼らは真相を知りたがっています。どうか、ご協力を・・・」

本当は、被害者の家族からの依頼など受けてはいない。さらりと嘘をつくミズキに、アーネストは、今度は違う理由で顔をしかめた。

二人の顔を見た後、男性は渋々ドアを開いた。

応接間のようなところに案内された二人はソファに腰掛け、男性と向かい合っていた。

ミズキは男性に二枚の名刺を渡した。一枚はミズキ。もう一枚はアーネストの物だ。もちろん偽名で書かれており、肩書は、アーネストが探偵。ミズキが助手であった。

「では、早速・・・」

ミズキがメモとペンを準備して、アーネストをちらりと見た。質問を始めろ、という合図だ。

「事件の様子をできるだけ詳しく聞かせてください」

アーネストが質問を始めた。

「ああ、やっぱりそれを聞かれるのか・・・」

男性は頭を抱え込む。

「俺は実際に事件を見たわけじゃないんだ。ただ、俺が最初に、殺された女を発見したというだけで、事件を見ていたという噂がただけなんだ」

「えっ？」

アーネストは声を上げた。

ミズキは無言のままだった。

今の言葉で用意していた質問がほとんど意味をなさなくなってしまった。

アーネストはミズキに指示を仰ぐ。仕方なくミズキはメモ用紙に新しい質問を書いてアーネストに渡した。

「じゃあ、あなたは犯人の姿を見ていないのですね？」

「いや、人かどうかはわからないが、殺された女の近くに何かがあった。暗くてよく見えなかったが、その目が妖しく光っていたのは覚えている。俺を見た後、すぐにどこかに逃げてった」

「被害者はどのような状態でしたか？」

「首に傷があって、血は出ていなかった。仰向けに倒れていて、恐怖に見開かれた目が俺を見ていたんだ・・・」

そう言って男は、震えながら頭をかきむしった。

「もう忘れさせてくれ。殺された女が、毎晩夢に出るんだ。そして、俺を殺そうとする。どうして助けてくれなかったんだ、と・・・」

「最後に一つ・・・」

今度はミズキが口を開いた。

ミズキはリーンベル・ローズヴェルトの写真を男性に見せた。

「この少女を見たことはありませんか？」

「・・・ああ、見たことあるよ。この街であんなに髪が長い女はいないから、印象的だった。真っ黒なドレスを着ていて、大きな荷物を背負っていたな・・・」

「そうですか。あと、何か他におかしな事件を聞いたことはありませんか？」

「最後と言っただろう」

男はミズキを睨んだ。

「ええ、そうでした」

そう言ったミズキは、アーネストを見て首を振った。もういい、ということだろう。

ソファから立ち上がり玄関に向かった。

「おい、探偵さん」

「？」

声を掛けられた二人は立ち止り、男性を見た。

「最近、他に連続殺人事件が起きている。最初の事件から一週間、既に三人が殺されている。どの被害者も銃で心臓を撃ち抜かれていたらしい。被害者の年齢はバラバラ。たぶん無差別殺人だ」

「ずいぶん詳しいですね？」

ミズキは疑いの目を彼に向ける。男性は顔の前で手を振った。

「警備隊が役に立たないから、自分たちで情報交換をしているんだ・・・」

「そうですか」

ミズキは頭を下げた。遅れてアーネストも頭を下げる。

「ありがとうございました」

二人は男性の家を後にした。

ミズキは男性の話を記したメモを見ていた。アーネストはミズキの後ろから付いて来る。

「どうだった？」

「ええ、一応、収穫はありました。思ったより少なかったですけどね」

ミズキは白い息を真上に吐いた。

「まず、僕は小さなミスをしていました」

不思議そうな顔をアーネストがする。

「探偵と助手の肩書を逆にしておくべきだった」

そう言ってミズキは笑った。

確かに、途中からあれこれとミズキが指示を出していた。さらに最後にはミズキ自身が男性と会話していた。これではどちらが探偵かわからない。アーネストが助手で、探偵に扱き使われているように見せた方がよかったかもしれない。

「こら、真面目な話だぞ」

アーネストはミズキを睨んだ。

「僕はいつだって真面目ですよ」

ミズキは笑って返した。

「とりあえず、事件については同一犯であることはわかりました。そして、リーンベル・ローズヴェルトが、ナシエルにいることも。十分といえは十分なのですが、今一つはつきりしない」

「何が？」

「事件を彼女が起こしたという確証が持てないんです。さっきの彼の話进行出して下さい。人かどうか知らないと言っていた。つまり、魔物かもしれない・・・」

「でも、時期的には重なっている」

「ええ。でも、今のところそれだけです。彼女が魔物を飼っていて、その魔物がやった、という可能性もありますが――」

「魔物を飼う!？」

アーネストが驚き、声を上げる。

「あくまで可能性です。それも、かなり僅かなもの。ああ、どうして僕はこんなことを言っているのだろうか？ 君と会ってお喋りになっってしまった・・・」

ミズキは溜息をついた。

「最近起きている連続殺人事件については？」

「恐らく何の関係もないでしょう。放っておけばいい」

「人が殺されているんだぞ？」

アーネストは軽くミズキを睨んだ。ミズキは何ともないという風な顔をしている。

「優先順位を考えてください。僕たちの目的はリーネル・ローズヴェルトを探し出すことです。他の事件など、気にしている余裕はない」

強い口調で言った。アーネストは食い下がろうとしたが、ミズキが続ける。

「まあ、彼女を見つけた後なら、別にかまいませんが・・・」

ミズキはアーネストから顔を背けた。そして、また溜息。

「ずいぶん、お人好しになってしまったものだ、内心で自嘲した。」「とりあえず、事件についての調査を続けましょう」

「まだ、続けるのか？ 今日ほそろそろ休みたいんだが」
もう、太陽が沈み、月が出ていた。

「今日は前の事件が起きてから、何日目でしょうか？」

ミズキが問題を出すように言う。アーネストはしばらく考え、手

を叩いた。

「ちょうど一週間か！」

「そうです。それに犯行は必ず夜に行われる。今日の調査はまだ続けるべきです」

夜のナシエルは視界が悪かった。街灯は所々にしか設置しておらず、照らされている範囲も非常に狭かった。エネルギー源に石炭を使っているため、途中で消えている物もある。

これでは街灯の灯りが届く範囲でしか人の顔の判別ができない。あの男性が犯人の顔が見えなかったのも、仕方なかった。

「誰もいないな」

「当たり前です。殺人事件加え、無差別連続殺人事件まで発生しているのです。誰も出歩こうとはしませんよ」

ミズキは何か『匂い』がしないか集中した。都合よく、感じ取れるようになっていたのだ。

見回りを始めて三十分、ミズキはかすかな匂いの変化に気が付いた。

一言で言えば、臭い。人肉の腐ったような匂いだ。

アーネストは気づいていないようなので、この匂いがミズキの能力によるものだとわかった。

ミズキは無意識のうちに早歩きになっていた。

「おい、どうした」

「『匂い』がします」

アーネストが息を飲む。ミズキの手は自然と腰に納めてある銃のグリップを握っていた。

徐々に匂いがきつくなる。匂いの元に近づいているのだ。

心拍数が上がっているのがわかった。額には寒いはずなのに汗が出ていた。

突然、乾いた破裂音が聞こえた。

「銃声——」

ミズキは舌打ちして走り出した。アーネストも後に続く。

それと同時に今まで感じていたはずの『匂い』を全く感じなくなった。効果が切れてしまったようだ。

仕方なく、音のした方向を頼りに走る。

真っ暗な路地から泣き声が聞こえた。女の声だ。

ミズキはその泣き声の主の元へ急いだ。

たどり着いた所で、少女が座り込んで泣いている。座り込んでいる地面は真っ赤になっていた。見慣れた赤。血の赤だった。

少女の真っ黒な服も真っ赤に汚れ。髪にも所々血が付いていた。

アーネストが近寄ろうとする。ミズキは片手を広げ彼を制止した。

疑問の目をミズキに向けるアーネスト。ミズキはもう片方の手で少女の隣を指さす。

そこには、胸から大量の血を出して死んでいる女がいた。

ミズキは泣いている少女に目を凝らした。

見た感じの年齢は十六歳前後。その金色の髪はとても長く、地面に接している。恐らく、立ち上がれば腰に届く長さはあるだろう。

真っ黒なドレスに身を包み、背には大きな荷物。

目撃証言と何一つ変わらない。

この少女こそ、リーンベル・ローズヴェルトだった。

第十一話 黒のドレスに月夜の呪文（後書き）

ついにリーンベル・ローズヴェルトを発見したミズキたち。

しかし、泣きじゃくる彼女の隣には銃で撃たれて死んでいる女が！
次話、事件はさらに加速する（？）

活動報告に今後の活動について書きました。

活動報告『お詫び m（――）m』を読んだけたら、と思います。
ます。

そして、今後の投稿の休止予定です。

8月29日～9月1日の間、連載を休止いたします。

その期間は部活の合宿で、家にいないので更新ができないのです。
お待ちいただいている方には申し訳ないことをしています。

どうかご容赦を……。 m（――）m

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第十二話 赤い花、胸に咲いた。

『散る散る落ちる、
赤の花。』

今宵は誰の
胸に咲く。

咲いた花は、
真っ赤っ赤。

次はあの子。
いいやあの子。

どの子の胸に咲こうかな。
種は男に握られて、

芽吹く時を
待つばかり。

』

ミズキは辺りを見回した。

だが、周りには人影は見えない。いや、見える範囲にいないだけで、本当はどこかに潜んでいるのかもしれない。

「アーネスト。銃を抜いてください」

ミズキが言った。アーネストは緊張した様子でミズキを見た。

「何をしているんですか？ 早く、銃を。辺りを警戒してください。まだどこかに隠れているのかもしれませんが」

険しい表情で言ったミズキに、アーネストはびくりと肩を震わせる。そして、拳銃を震える両手で取り出した。

ミズキは銃を腰に納め、泣き続けるリーネルに近づいた。隣の女性を一度だけ見たが、撃たれている場所はどう見ても心臓だ。血の量からして、助からない。それに、既に見開かれた目からは光が消えていた。

「リーネル・ローズヴェルト。貴女を探していました。僕と一緒に来てください」

ミズキはそう言った後、自分の発言の過ちに気づいた。どう考えても、今、言うべき言葉ではない。リーネルの隣で死んでいる女性が見えるところから撃たれたとは限らない。もし、見えない場所から撃たれていた場合、銃声のすぐ後に姿を現したミズキたちが、この女性を殺したと思ってでも仕方がない。

「すみません。僕たちは銃を所持してはいますが、彼女を撃つたのは、僕たちではありません」

今さら遅いか。

聞こえないように小さく舌打ちしたミズキ。リーネルは首を横に振った。

「お姉さんたちが殺したのではない。それは、わかっています。」

彼女は震える声で言った。

「犯人の顔を見たんですか？」

彼女は無言で頷いた。

「急に、男の人が現れて、私の隣にいた、その人を——」

「ミズキ、まだか！」

周囲を見回していたアーネストが叫ぶ。彼の声も恐怖で震えていた。取り乱さないだけ、まだマシかもしれない。

銃声とともに、近くにあった街灯が割れた。やはり、まだ近くに潜んでいたようだ。

「ミズキ！」

アーネストがまた叫ぶ。

「話は後です。貴女を保護します。僕に付いてきてください。ここには、危険だ」

ミズキはリーンベルに優しく言った。彼女は涙を拭い、首を縦に振った。

ミズキの手を借り、その場に立ち上がったリーンベル。金色の髪は、既に腰に届いている。彼女はアーネストを見た。

「彼は？」

泣き止みはしたが、まだ声が震えている。

「僕の助手です」

ミズキは微笑んだ。そして、彼女の手を握り、走り出す。

「アーネスト、逃げますよ」

アーネストに向かって叫んだミズキ。それとほぼ同時に、また数発の銃声が聞こえ、近くの街灯がいくつか割れた。

ミズキが先頭を走り、その後ろをアーネストと、彼に手を引かれたリーンベルが走る。まだ銃声は聞こえており、街灯もそのたびに割れている。ちょうど、ミズキたちが通り過ぎた街灯が割られていた。

明らかに楽しんでいる。いつでも殺せるということを、相手はアピールしているのだ。それを理解したミズキの背に、嫌な汗が伝う。

既に三人とも息が上がっている。相手は疲れ切ったところで、また姿を現すだろう。そして、恐怖に怯えるミズキたちを順番に殺していくはずだ。

このままでは、確実に三人とも殺される。

ミズキは後ろを振り返った。

街灯を割られたせいで、すぐ後ろは真っ暗だ。何も見えない。足音は聞こえないが、恐らく、相手はミズキたちの後ろから追ってきている。

前方には分かれ道があった。

小さいが、チャンスがやってきた。ミズキはそう思うことにして、銃を抜いた。

走りながら銃を両手で構えたミズキは、前に見えるすべての街灯を、正確に打ち抜いた。

「何をしている。真っ暗で何も見えないぞ!」

息を切らしながら、アーネストが叫ぶ。

「静かにしてください。気が付かれたらどうするつもりですか?」

「・・・?」

「僕が囨になります。アーネスト、君は彼女を連れて、右の道を通ってください。僕は左に行きます」

「なっ!」

「僕たちが泊まっているホテルの道は、わかりますね? 二手に分かれた後、できるだけ速く、ホテルに戻ってください。ここからは遠いですが、とにかく走ってください」

「お前は どうするんだ?」

「僕は追手を撒いてから戻ります」

「大丈夫なのか?」

「わかりません。僕が朝までに帰らなかったら、彼女を置いて逃げなさい」

アーネストが息を飲む。

「そんなことできるか! 必ず戻ってこい!」

「・・・わかりました」

ミズキは苦笑した。そして、分かれ道にたどり着く。一瞬だけ二人は目を合わせ、左右に分かれて走り続けた。

「気を付けて・・・」

リーンベルが小さな声で言ったが、ミズキの耳には届いていなかった。

ミズキは街灯を銃で打ち抜きながら走った。追手がミズキの方へ来るかどうか、賭けに近い物がある。

だが、相手もミズキが街灯を割っているのは、姿を見せないようにするためだと、気づいているはず。つまり、そっちの道に、追っている対象がいると考えてもおかしくはない。

自分の方に追手を引きつけられていることを、祈りながらミズキは走り続けた。

ホテルに戻ったアーネストたちは、部屋に閉じこもり、ミズキの帰りを待っていた。部屋は間接照明のみを使用して、カーテンも閉め切っていたため、かなり暗かった。

血の付いたドレスでは気持ち悪いだろうと思ったアーネストは、とりあえず彼の服を貸し、彼女に着てもらっていた。身長がミズキより少し小さな彼女には、大きすぎるが、何もないよりはいいだろう。

既に五時間以上経過しているが、まだミズキは帰ってこなかった。時間が経つにつれ、徐々にアーネストの不安も大きくなっていった。

「・・・・・・・・」

「あの・・・・」

リーンベルが声をかけた。

「どうした？」

「シャワーを貸していただけじゃないかしら？ その、・・・・こんな時に、不謹慎だとは思うけれど、体に付いている血を洗い流したいの・・・・」

あまりの事態に失念していたが、彼女は殺された女性の返り血を浴びて、髪や服が汚れていた。上品に聞いてきた彼女に一瞬、見れながら、アーネストは頷いた。

不謹慎だ。

俺が。

この状況で、少女に目を奪われてしまった自分が嫌になった。

アーネストはバスタオルをリーンベルに手渡し、ベッドに座り込んだ。

しばらくして、シャワーの音が聞こえてきた。水の音に混じって嗚咽のようなものが聞こえる。きっと、アーネストの前では泣けなかったのだろう。

彼は会ったばかりのリーンベルより、罔になったミズキの心配をしていた。彼女には一切話しかけず、関わりうとしなかった。いや、正確にはリーンベルの存在などすっかり忘れていた。

もうすぐ、日が昇る。

朝が来るのだ。

本当に帰ってこなかったら？

ミズキはリーンベルを置いて逃げろと言った。

彼女が今さらになって、シャワーを浴びたいと言ったのは、ミズキとの会話を聞いていたからだろう。

見知らぬ少女。

自分とは全くかわりがない。

出会ったばかりで、彼女は俺の名前すら知らない。

置いて逃げることは簡単。

だが、この少女は命を狙われているかもしれない。

放っておいたら殺される。

そんな子を、見捨てることなどできない。

ミズキがもし、帰ってこなければ、俺がこの子を守るしかないのか……。

だが、俺にそんなことが可能なのか？

アーネストは頭を掻きベッドに倒れ込んだ。

ミズキは仕事で、リーンベルを探していた。

自分はただ、その手伝いをしていただけ。

なのに、割り切ることができない。

溜息をついた。

それは、彼が決心したことを表す溜息だった。

次の朝、街の別々の通りで二つの死体が発見された。

さらに、その付近で街灯がすべて割られており、殺人事件との関係が疑われている。

一つは女性の死体。首に小さな切り傷があったが、死亡した原因はそれではなく、銃で胸を撃ち抜かれたからだと推測される。

もう一つは、男性の死体。こちらは損傷が激しく、体中に穴が開いていた。顔面の損傷は特に激しく、体の各部分から、辛うじて男性とわかる程度だった。

恐らく、穴の原因は銃弾によるものとされる。被害者は死亡してから弾丸を浴びせられており、加害者に非常に強い恨みを持たれていた、と分析されている。

それはまた、別のお話・・・。

第十二話 赤い花、胸に咲いた。(後書き)

お久しぶりです、コウです！

・・・・・・？

気のせいでしょうか？

自分で読んでみたのですが、文章の雰囲気が変わった気がします。

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

恋愛関係感応機構（前書き）

サブタイトルですが、ちょっと無理矢理感があり、皆様に伝わらない可能性があるので、いずれ変更するかもです・・・。

m

（
|
|
）

もし、本文を読んだうえで、サブタイトルを気に入ってもらえたら、活動報告のコメント欄に書き込んでいただければ、変更はしないと思います。

恋愛関係感应機構

『異国の地。』

異端者たちの、

叫び声。

自由を叫ぶ、

叫び声。

どこに届く？

届かない。

いずれ届く？

届かない。

それでも叫ぶ。

それはなぜ？

』

「^{かなこ}加奈子君。 どうして、この研究所が、ばれちゃったんだろうね？」

「^{きよたか}清隆さん。 今はそんなことどうでもいいから、手伝っていただけませんか？」

「嫌だよ。 オジサン、喧嘩弱いし。 加奈子君の方が強いだろう？」

加奈子は扉を押さえつけながら、植村を睨んだ。 彼女の白衣は既

に血で赤く染まっていた。彼女の血ではない。襲撃者や、研究所にいた同志たちの血だった。それとは対照的に、植村の白衣はいつもの様に薄汚れているだけ。逃げることに専念しているからだった。

警報が騒がしく鳴り響く中、植村は真っ白な髪を掻き揚げながら、悠長に煙草を吸っていた。加奈子は扉にロックをかけ、バリケードの何重にも築きあげていた。

「内通者でもいたのかな？」

植村は静かに呟く。だが、表情からはまったく焦りを感じさせない。

「エトワールさんを運び込んだときに、見つかったのかもしれない」

「ああ、冴羽が押し付けてきたあの患者か。まあ、手術も終わって、国に帰してあげたし、彼女の心配はいらないだろう」

「話が反れています・・・」

加奈子は溜息をつきながら言った。既に弾の尽きた拳銃をその場に捨て、デスクの一番下の引き出しからサブマシンガンを二丁取り出す。その片方を植村に投げた。

「僕、銃なんて使ったことないんだけど？」

「銃口を撃ちたい対象に向け、トリガを引くだけです」

「へえ、こんなふうに？」

そう言うと植村は、加奈子の胸に銃を突きつけた。加奈子は全く表情を変えない。

「ええ、そんなふうに」

「トリガを引けば、君は死ぬ？」

「ええ、死にますね」

「撃ってもいいかな？」

「ええ、どうぞ。あなたの望むままに」

加奈子は微笑んだ。そして、両手を広げる。どこか悲しそうな微笑みに、植村は唇を噛んだ。

「すまない。冗談だ」

植村は加奈子を抱き寄せた。加奈子は広げた手を植村の腰に回す。力いっぱい抱きしめあった。植村の白衣に、加奈子が浴びた返り血が付く。

二人は離れて、数秒間見つめ合った。

二人の距離は再び徐々に近づく。植村は少し腰を曲げ、加奈子は少し背伸びをした。息が触れ合う距離になると、お互いに目を閉じた。

唇が触れ合う。

ああ、何ということだろう。

口づけという行為だけで、自分はこの男に愛されていると感じられる。

ただ、行為だけのはずなのに・・・。

いや、行為だからこそ、伝わるのだろうか。

言葉では伝わらない。

そんなものがあるのだ。

その逆も、また然り。

だが、今は言葉より、行為の方が嬉しかった。

私が私である。

そんな場所は彼の傍しかない。

そう感じさせてくれる。

今、この瞬間が、とてもとても幸せ。

二人はゆっくりと離れる。

すぐに背を向け、新しい煙草を吸い始めた植村に、加奈子は微笑んだ。

「ありがとうございました」

「何が？」

植村は背を向けたまま聞く。

加奈子は一瞬言葉に詰まり、植村には見えないとわかっていながら、もう一度微笑んだ。

簡単なことなのにすぐに言えない。実を言うと恥ずかしかったのだ。

不思議だ。なぜか、付き合い始めた時のことを、少し思い出してしまう。

初めてのキスのような気持ちだった。

「キス。嬉しかったです」

「そうかい。それはよかった」

そっけなく答えた植村だが、それは照れ隠しのためだと言うことを、加奈子は知っている。キスの後、植村は必ず背を向けるのだ。

一度だけ、その顔を覗いたことがある。テールランプの様に真っ赤だった。

加奈子はそのような植村が愛おしくてたまらない。研究に没頭する彼も、笑えないジョークを言う彼も好きだったが、キスをした後の彼が加奈子が一番好きだった。

植村は煙を深く吸い込み、溜息とともに吐き出した。そして、加奈子の方へ向く。

既にさっきのことは、すべて忘れ去った顔だった。加奈子は少し寂しさを感じたが、思考を切り替え、無表情で植村の目を見返した。

「現状報告を・・・」

「はい。――――襲撃してきたのは、装備から、日本国の特殊部隊と見て間違いありません。現在、Cブロックまで制圧されました。連絡が取れている所員は、十数名です。他のブロックで応戦しているようですが、いつまで持つか、時間の問題かと・・・」

「そうか」と呟いた植村は、靴底で煙草の火を消した。

「残念だ。非常に残念だよ。みんな優秀な人材だった。それがこんなところで、死んでしまうなんて。・・・今から助けに行くことは

可能か？」

「可能です。ですが、よく考えてください。彼らは何のために戦っているか。貴方の頭脳を護るためです。助けに行って、もしあなたが死ねば、同志たちの死は無駄になります。ここは逃げるべきです」
「.....」

一瞬険しい表情を見せた植村だが、力なく首を縦に振った。

「どうして国は私たちの邪魔ばかりするのだ？ 私はただ、研究がしたいだけ。自分の理論が正しいのか確かめただけなのだ・・・」

植村は顔を手で覆い、天井を見た。加奈子はそんな植村に、なんの声をかけることもできなかった。

植村の研究は日本国、いや世界のどの国でも許されることはないだろう。得られるものはとてつもなく大きいが、倫理的に違反している物が多いのだ。そのため、彼は身をひそめて活動している。しかし、他国からの体裁を、必要以上に気にする日本国は、植村のような異端者を許しはしない。国中を探し回り、始末しようとする。過去に植村のような考えを持った同志たちも、ことごとく抹殺されてきた。

「また、一からやり直しか」

「やり直せるだけマシです。彼も頑張っているんですよ？」

「復讐を果たすために、ね。だが、君の言うとおりにかもしれない。生きていれば、何度でもやり直しがきく事もある」

加奈子は、バリケードを作った反対側のドアを開けた。敵の姿は見えない。深呼吸して廊下に飛び出した。後ろを植村が付いて歩く。

飛び出してきた敵に銃弾を浴びせながら、加奈子は植村とともに研究所を脱出するため前進した。

「そう言えば、冴羽の奴。『あの子』には出会えたのだろうか？」
不意に植村が口を開いた。

加奈子は壁を背にして、敵に向かって弾幕を張っているところだった。

「加奈子君？」

「聞いてます。今、話しかけないで——っ、弾切れ!？」

最後の弾倉^{マガジン}が空になり、加奈子は舌打ちした。

「残念だけど、僕の方もだ」

「この辺りに、銃を隠している所はありますか？」

「いや、ないね・・・」

二人の声は、攻撃手段がなくなったと言うのに、少しの焦りも感じさせない。

「絶体絶命。万事休すか」

植村は腹話術の人形のような、渴いた笑みを浮かべた。加奈子は溜息をつきながら植村を見た。

「まだ手はあります。ライタを貸していただけますか？」

「何に使うんだ？」

加奈子は速くよこせと言わんばかりに、手を差し出す。

「『魔法』です」

加奈子の言葉に、植村は目を丸くした。今回の襲撃の中で、植村が一番驚いた瞬間だったかもしれない。

「あれ？ 加奈子君、魔女の血を引いてたっけ？」

「ええ。ただし、遠縁なので血は薄いです。髪が黒いのもたぶん、そのせいです」

「初耳だな」

「聞かれませんでしたから」

ライタを受け取りながら言う。

「それに、知られたら、夫婦喧嘩の時に使えないでしょう？」

彼女はくすりと笑った。植村もつられて笑う。

「制御が難しいので、少し離れていてください」

加奈子はライタの火を点け、目を閉じる。禍々しい空気が彼女を包む。ライタの火は徐々に大きくなり、加奈子が敵に向かってそれを振った。

炎は巨大な鞭となり、通路に隠れていた襲撃者たちを次々に無力化していく。そして数回、加奈子が腕を振ったところで、ライタにひびが入り、粉々に砕け散った。

さっきまで聞こえていた多数の銃声は一つも聞こえず、その代わりに、いつの間にか作動してたスプリンクラーの水の音が、廊下に響いていた。

力が抜けたように、その場に倒れ込む加奈子を、植村はそっと抱き寄せた。彼女は目を閉じ、眠ったように呼吸している。

魔女の力は、血が濃いほど、強くなる。そして、体への負担も小さくなる。加奈子は遠縁に魔女がいると言った。魔女の血が薄い彼女にとって、今の魔法はかなりの負担を強いただろう。

「君は強いな。私なんかとは大違いだ・・・」

植村は加奈子の頭を撫でながら呟く。

「君がいなければ、既に私はこの世にいないだろうね。でも、君がもし、誰かに殺されそうになったら、その時は、――――」

植村は息を深く吸い込んだ。

「―――その時は、せめて私の手で、君に止めをさせてくれ」

そう呟いた植村は、目を閉じている加奈子に、そっとキスをした。

唇を離し、加奈子を見つめていると、彼女がくすりと微笑んだ。

「それ、プロポーズの時と同じ言葉ですよ？」

恋愛関係感応機構（後書き）

今回は間章ということで、ウエムラとカナコの物語でした。
次話から、第二章です！

アーネストの決心とはいったい・・・。

最近の冒頭部の『 』で囲まれた部分ですが、解説のようなものは、本文ではない予定です。

申し訳ありませんが、なんとか推理（？）していただけたら、と思っています。

そして、冒頭に限らず、本文にはたくさん謎（伏線と言った方がいいかも？）を張り巡らせているつもりです。

「ここって、こういう意味？」「実は○○？」

という推測や展開の予想は大歓迎です！

感想欄でなくとも、メッセージを送っていただけると嬉しいです！
というのも、私自身がそういった予想をしては友人にぶちまけちゃうやつなのです。

ただ、私はネタバレをするつもりはないので「なるほど」（ニヤニヤ）「えっ!？」（アセアセ）「みたいなあいまいな表現しか返せないかもしれないですね。あ、でも、冒頭部に関しては推測、予想していただいた方や、読者様の要望があれば、活動報告等で解説のようなものをしようと考えております。

m () m

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第十三話 無知 優美 疲勞

『ゆらりゆらりと

黒い彼。

煙草の煙

燻^{くゆ}らせて。

歩くは一人、

闇の中。

偽の仮面、

外す時。

彼は一体どこへ行く。』

小鳥のさえずる声で、アーネスト・エトワールは目を覚ました。

どうやら、いつの間にか寝ていたらしい・・・。

「————ミズキっ！」

自ら囹になり、敵を引きつけ、それ以来帰ってこない友人、サエバ・ミズキを探す。

だが、隣のベッドには、すやすやと寝息をたてている、リーンベ

ル・ローズヴェルトの姿しかなかった。その枕は少し濡れている。よく見ると、リーネルの目元から零れ落ちる雫があった。

アーネストは黙って、涙を拭いてやる。そして、彼女の頭に手を置き、何度か往復させた。

ベッドから立ち上がり、服を着替えた。

顔を冷たい水で洗い、鏡を見た。

なんて顔をしているんだ。一度決めたことだろう。

頭を横に何度も振り。雑念を振り払う。

何度か頭を叩き、何とか頭に浮かんだことを、忘れようとする。だが、できない。ミズキの心配。これからの不安。それらが一気に押し寄せていた。

洗面所から出ると、リーネルが荷物をまとめていた。背後に視線を感じたリーネルは、振り向くと、びくりと肩を震わせる。

「あ、あの―――」

「心配なくていい。俺はあんたに何もしない」

アーネストがそう言うと、彼女は下を向いた。

突然、ドアがノックされた。アーネストは飛び上がりそうになりながらも、何とか平静を装い、ドアに向かった。

覗き穴から誰が来たのかを窺う。それは、少し期待していた待ち人ではなく、意外な人物だった。期待していた自分と、驚いた自分。そして危険がないとわかり、ほっとしている自分に呆れ、溜息が漏れる。

念のため、ドアチェーンはかけておく。

ドアを限界まで開き、部屋の外にいるホテルマンを見た。

「おはようございます。今朝、自治団体から連絡がありました」

「自治団体？」

自治団体―――街の住民たちによる組織。主に、事件等の情報を

共有するために、活動しているらしい。

「今朝、いくつか事件があったようです」

「・・・」

アーネストは緊張した様子で、ホテルマンを見た。彼にもその緊張が伝わったのか、表情が強張っていた。

「一つは女性の殺人事件で、銃で胸を撃ち抜かれていたようです」

これは昨日、リーネルを見つけた時に、殺されていた女性の事だろう。こちらについては、自分にも情報がある。

「もう一つは、被害者が男性か女性かわからないのですが、こちらも殺人事件です。ずいぶんと質が悪いです」

被害者が男性か女性かわからない。その言葉は、アーネストの心を大きく揺さぶった。

ミズキは一見すると、いや、彼の口から「男だ」と語られなければ、女にしか見えない。しかし、アーネストはミズキと長くいたせいで、男性か女性かわからない人物、と認識してしまっていたのだ。「そんな・・・」

アーネストは一人呟く。その様子をリーネルは黙って見ていた。「そして、警備隊は重要視していないようなのですが、複数の女性が、後ろから何者かに襲われ、眠らされる。という事件も起きています。どうか、お気をつけて」

ホテルマンはゆっくりとドアを閉めた。

ドアの閉まる音と同時に、アーネストはその場に座り込む。最後の事件の話など耳に入っていないかった。

ミズキが死んだ？

それは彼の肩に大きな塊として、のしかかってきた。

あの時に、もしミズキと一緒にいれば、彼は死なずに済んだのだろうか。

そんな考えが、頭を過った。

後悔しか出てこない。

座り込んだままのアーネストの肩に、リーネルがそっと手を置

く。その手の感触。そして、その暖かさに、癒されていく気がした。自分が心配をかけてどうする。

アーネストは自分を奮い立たせるように、立ち上がった。

「リーンベル」

「はい。あの、どうして私の名前を？」

「ああ、そのことについて。それと、今後の事に付いて、伝えたいことがある」

アーネストは部屋の中にある椅子に座り、リーンベルはベッドに腰掛けた。

「昨日、君と出会ったとき、俺と一緒にいた男を覚えているか？」

「男？ 女の方でしたら――」

「あいつは男だ。そう言っていた」

「まあ・・・」

「サエバ・ミズキ、それがあいつの名前。あいつは仕事で、君を探していた。俺はその手伝いをしていたんだ」

「いったい何のために？」

「わからない。そこまで詳しいことは聞いていない。ただ、依頼で人探しをしている、としか・・・」

「――お父様かしら？」

「え？」

「いいえ、こちらの話です」

リーンベルはにっこりと笑う。だが、表面だけの笑みで、どこか寂しさを感じさせる。彼女が、どこかミズキに似ているような気がした。

「ミズキは、自分が朝までに戻らなければ、君を置いて逃げろと言った」

アーネストはリーンベルの目を真っ直ぐに見た。彼女の息を飲む気配が伝わる。服の裾をギュッとつかんでいた。

目を閉じて、一度大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出す。

「だが、俺にはできない。放っておけば殺されるとわかっている人

間を、見捨てることなどできない」

リーネルの顔に光が宿った。

「俺は君を助きたい・・・」

「ありがとう、ございます」

彼女はベッドから立ち上がり、アーネストに抱き着いた。声は聞こえないが、涙を流しているのはアーネストでもわかった。

金色の髪が、ふわりと後から付いて来る。その髪をアーネストは、優しく撫でようとした。

その時、

突然。

本当に突然。

誰が予想など、しているものか。

轟音？

銃声？

鳴り響く、

続けて二発。

鍵とドアチェーンが撃ち抜かれた。

「――リーネル！」

アーネストはリーネルを自分の後ろに隠し、銃を抜く。震える両手で、何とか構え、銃口をドアに向けた。

ゆっくりと、

ゆっくりと、

ドアが開く。

まだ、外にいる人物は見えない。
長い時間をかけて、

ドアが開く。

十秒？

一分？

本当は、

もっと短いかもしれない。

汗が額を伝う。

体内の、

警報が鳴りやまない。

手が、ドアにかかった。

その手は、真っ赤。

心臓が跳ね上がりそうになる。

まだ、撃つには早すぎる。

相手が見えてからトリガを引こう。

それからでも、遅くはないはず。

ドアが開く。

「疲れた・・・」

扉の向こう側にいた人物が、顔を見せる。

「え？」

アーネストとリーンベルは、お互いに顔を見合わせる。そして、扉にもたれかかっている人物を見た。

サエバ・ミズキが、そこにいた。

「アーネスト。なんでまだここにいるんですか？」

体中、血まみれになったミズキが口を開く。

「それより、その血は！？」

「ああ、これですか？」

ミズキは乾いた笑みを浮かべる。疲れ切った笑みだった。

「大丈夫。五パーセント程度しか、僕の血は混ざっていません」

「じゃあ、それは一体・・・」

「聞きたいですか？」

ククク、と喉を鳴らして笑う。

「ドア、壊してしまいましたね。すみません、気が立っていたもので・・・」

「今は、別にどうでもいい。なにか手伝えることはあるか？」

「そうですね。――いや、今は眠りたい」

意識を失ったかのように、ミズキはその場で眠ってしまった。

第十三話 無知 優美 疲労（後書き）

うん。

未だに、リーネルをちゃんと書けないです。

速く書きたい人なのにな・・・。

サブタイトルですが、毎回一応、少なからず意味があります。（笑）

次話

目的達成？

リーネルは大人しくついてきてくれるのか・・・！？

因みに、次話から『願い事』のような、キャラとの会話を後書きに載せていきたいと思います。

あ、あと、もしよろしければ、私の活動報告『優しい嘘とは・・・。』を読んで、協力していただけないでしょうか？

詳しくは9月10日『優しい嘘とは・・・。』で、お願いします。

m () m

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第十四話 Merry Go Round

「ミズキさん。ご飯、食べないんですか？」

「ええ。僕はお腹すいてないので」

そう言うミズキは、ぬるくなったコーヒーを啜^{すす}った。リーンベルは心配そうにミズキを覗き込む。

「でも、少しは食べた方がいいのではないかしら？」

「リーンベル。放っておけ、ミズキは喫茶店ではコーヒーしか頼まないんだ」

アーネストが横から口をはさむ。

「まあ、そうなのですか？」

ミズキは軽く頷いた。

「こいつと一緒に行動するようになって、何度か一緒に店に入ったが、いつもコーヒーだけだったよ」

「僕が何を頼もうと勝手でしょう？」

「まあ、それもそうだな」

ミズキはポケットから煙草を取り出して火を点けた。その様子をリーンベルが凝視している。

「もう、体の方は大丈夫なのか？」

「大丈夫でないように見えますか？」

「いや・・・」

確かにホテルに帰ってきた当初は、血まみれだったミズキだが、シャワーを浴びた後にはすべての血が消えており、頬にあるかすり傷のようなもの以外、怪我はなかった。どうやら、「五パーセント程度」と言っていたのは、嘘ではないらしい。

「ところで、リーンベル。そのリュックサックの中には何が入っているんですか？」

ミズキは、リーンベルの隣に置いてある大きなリュックサックを指さした。

「これですか？ 本が入っています」

「一冊だけ？」

「ええ」

「もしよかったら。読ませていただだけませんか？ 僕も本が好きなんです」

「申し訳ありませんが、それはできません」

「どうして？」

ミズキはリーンベルを怖がらせないように、極力優しく聞いた。

「・・・・・・」

リーンベルは沈黙したまま、アーネストの袖を引っ張った。アーネストは驚き、ミズキは溜息をつく。

「アーネスト。君と言う人は・・・・」

「違う、俺は何もしていない！」

「わかりました。読ませてくれなくてもいいです。内容だけでも少し教えてくれませんか？」

「それくらいなら・・・・」と言ったリーンベルは、リュックサックの中から古ぼけた本を取り出した。かなり分厚い本だ。日本国の『広辞苑』と同じか、それ以上の分厚さだと、ミズキは思った。

「これは、封印書です」

「封印書？」

「ええ。危険な、物や魔物を封じるための方法が書かれた本。私はこの封印書に書いてあることをやりなさいと、言われていたの」

「誰に？」

「・・・・・・」

リーンベルはまた口を閉じ、下を向いた。

「なあ、ミズキ。あんなことがあった後なんだ。気になるのはわかるが、もう少し気を使ってやってもいいんじゃないか？」

「君は、甘いな」

ミズキはそう言って、コーヒーを飲み干した。

「本は好きですか？」

ミズキが聞いた。

「ええ。大好き。今まで、たくさんの本を読んできたわ」

恐らく、気を使ってやっているのだろうと、アーネストは思う。

「どんな本が好きですか？」

「物語が好き。あ、でも、論文も好きね。あと・・・そう、辞書も捨てがたいわね」

「辞書？」

「ええ、この国の物だけではなく、外国の本も好き。いろいろな言葉を知ることができるわ。ミズキさんって、日本国の人よね？」

「ええ、そうですが。何か？」

「私、『国語辞典』も読んだことがあります」

「へえ、珍しいな。俺なんて、物語すらまともに読んだことないのに」

アーネストが感心する。

「そこ、感心するところが違いますよ」

ミズキが言う。

「どうして？」

不思議そうな顔をするアーネストに、ミズキは耳打ちする。

「さまざまな国の辞書を読める、と言うことは、その国の言葉を理解できる、ということです。彼女、凄い語学力を持っています。それに論文を理解できるのも凄い。とんでもなく頭が良いようですね」「そうなのか」とアーネストは呟く。

リーンベルは楽しそうに、今まで読んできた論文の話をする。ミズキは何とか話に付いて行けたが、アーネストに至っては目を回していた。

リーベルの話がようやく終わり、それと同時に、ミズキは煙草に火を点けた。また、リーベルがその様子を凝視している。

「ねえ、ミズキさん？」

「はい」

「煙草を一本いただけじゃないかしら？ 私、煙草を吸ってみたいわ」
煙草の箱に手を伸ばすが、ミズキがさっとポケットの中にしまった。

「駄目です。煙草は体に悪い」

「じゃあ、何故、貴方は今も吸っているの？」

「どうしてでしょうか。早く死にたいからかもしれません」

リーベルの問いに、ミズキは笑いながら答えた。

「まあ、私をからかうのね？」

リーベルは顔を少し膨らませた。

「いいえ、からかうだなんて、とんでもない。実際に煙草一本で、人の寿命は五分縮むと言われています」

「じゃあ、一回、煙を吸いこむだけ。お願い」

両手を顔の前で合わせ、彼女は首を傾げる。どうやら、彼女は合掌の意味を知っている様だ。これも、本で読んだのだろうか。

ミズキは、そんなことを考えながら、まだ半分も吸っていない煙草の火を揉み消した。

「あっ！」

リーベルは声を上げる。

「駄目です」

ミズキは微笑みながら言った。

「ミズキ。こんなところでゆっくりしていて大丈夫なのか？」

アーネストは不安そうな顔をミズキに向けた。

「ええ、大丈夫です。もう、追手の心配はありません」

「どうしてそう言い切れる？」

「帰ってきたときの、僕の状態を忘れましたか？」

帰ってきたときのミズキの状態。血まみれになって、帰ってきたミズキ。だが、自分の血は五パーセント程度しか含まれていない、と言っていた。

つまり、追手を殺した。血まみれになるような殺し方をした、ということだ。できれば、そんなことは想像したくなかった。

「なんて顔をしているんですか？ 冗談ですよ」

ふっとミズキが笑う。

「からかうのはよせ」

リーンベルはずっと二人の様子を見ていた。

「二人とも、仲がよろしいのね」

首を横に傾けながら言う。

「別に、僕はそう思っていないませんが・・・」

「俺だっと思っていないさ」

二人はお互いを横目で見ながら言った。

「あら、そうかしら？ 少なくともアーネストさんは、ミズキさんのことを、好きでいるようだけれど」

「アーネスト、君という男は・・・」

ミズキが呆れた顔で、アーネストを睨んだ。心なしか、さつきよりもアーネストとの距離が離れている。

「そんな訳ないだろう！ おい、リーンベル！」

「あら、違うの？ ホテルに戻った時、私の事なんか気にかけず、ミズキさんの心配ばかりしていたくせに・・・」

「それはそうだが、言葉が足りていない」

ああ、とリーンベルは頷く。

「ごめんなさい、言葉が足りなかったわ。友人としての『好き』よ」
「なるほど。そういうことですか」

「当たり前だろう」

アーネストは溜息をついた。

意外と彼女はトラブルメーカーなのかもしれない。

「もう、止めましょう。こんな不毛な会話は」

ミズキが無表情で言った。リーンベルは二人を見ながら、くすくすと笑っていた。

「ところでリーンベル。あなたに聞きたいことがあります」

リーンベルは不思議そうな顔で、ミズキを見た。

「あの時、何があったのか。できるだけ、詳しく教えてください」
ミズキは無表情だった。

「あの時・・・」

俯いたリーンベルの身体が次第に震えだす。彼女は自分の体を抱き、震えを抑えようとした。

「ミズキ。追手が来ないのなら、それは別の機会でも、いいんじゃない」

ないのか？」

アーネストが心配そうに口をはさんだが、ミズキはそれをすぐに否定した。

「いいえ。確かに、追手は来ませんが、必要なことです。リーンベル、話してくれますね？」

ミズキの厳しい口調に、リーンベルは肩を震わせた。そして力なく頷いた。

「あの時、私は、あのお姉さんと話をしていました。いつだったかしら？ お姉さんの、顔が恐怖で歪んだの。私は何があったのかわからなくなつて、とにかくお姉さんを落ち着かせようとして、近づいたわ。でも、彼女は後ずさりした。そして――」

「撃たれたのか？」

アーネストが小さな声で聞いた。

彼女は小さく頷く。

「突然のことで、驚いて。後ろを見ると男の人が・・・」

そこまで言つて、リーンベルは顔を手で覆つて泣き出してしまった。声こそは殺しているが、ミズキには肩の震えでわかった。

「彼は、あなたを追っているようでした。何か心当たりはありますか？」

彼女は俯いたまま、首を横に振った。

「いいえ。何も・・・」

その時、僅かにアーネストの中に引つかかるものがあつた。ミズキが依頼で、リーンベルを探していると伝えたとき。彼女は何かを呟いた。何を言つたかまではわからなかったが、何か思い当たる節がなければ、あのタイミングで呟くことは、普通ではないだろう。

「そうですか・・・では、最後にもう一つ」と、ミズキは煙草の火を消した。

「僕はある依頼で、あなたを探していました。依頼主の所まで、連れて行く必要があります」

リーンベルは涙を拭い、ミズキを見た。

「私にその必要はありません」
強い拒否の言葉だった。二人の間に流れた不穏な空気に、アーネストは息を飲む。

しばらく沈黙が続いた。

ふっと息を漏らすリーネル。

「わかりました。あなたに付いて行きます。そうでもしないと、縛り上げてでも、連れて行かれそう。但し——」と、彼女は目を閉じた。

「私にも成さねばならないことがあります。それが終わってからでもよろしいですか？」

「成さねばならないこと？」

「お父様から、申しつけられているのです。封印書に書いてある、素材を収集して来い」と

「なるほど。それは、すぐに終わりますか？」

「ええ、この街の近くに、鉱山があるでしょう。そこにある、鉱石が最後の素材なんです」

「わかりました。協力しましょう。僕も穏便に事を済ませたい」

「よかった。ミズキさんなら、そう言ってくれると信じていました」

リーネルは微笑んだ。

「出会ったばかりなのに？」

ミズキも微笑む。

「ええ。出会ったばかりなのに、不思議ね」

アーネストは胸をなでおろしていた。

「そうとなれば、早速、準備をしましょう。明日には出発しますよ」
ミズキは椅子から立ち上がりながら言った。

「もう少し、ゆっくりしてもいいのでは？」

「言い忘れていましたが、僕には時間がありません。期限までに、あなたを連れて行かなければならない」

「その期限は？」

「あと、一か月」

「まあ、それは急がなければいけませんね」

席を立ち、料金の支払いに行ったミズキのポケットから、一枚の写真が落ちた。リーンベルがそれを拾い、じっと見る。それは、ミズキと黒髪の少年が笑顔で写っている写真だった。

アーネストがそれを覗き込む。

「なんだ、ミズキ。お前、こんな顔もできるんじゃないか」

その写真に写っているミズキは、いつものような笑顔——意識して作った笑顔ではなく、心からの笑顔の样に見えた。

「勝手に人の写真を見ないでください」

リーンベルの手から写真を取り上げる。

「お友達ですか？」

「ええ。古い友人です。もう、亡くなってしまいましたが・・・」

「あ、すみません。その・・・」

「いえ、気を遣わなくても大丈夫。それに、亡くなっていると言っても、半分は生きていますし」

アーネストには、その言葉の意味が全く分からなかった。

「あの頃はよかったな」

そう呟いて、微笑んだミズキ。

どこか寂しげな、その笑顔は、やはり作られたものにしか見えなかった。

第十四話 Merry・Go・Round（後書き）

今回、編集により、いつもより長くなりました。
日常パート、というやつかもしれません。

久しぶりに、ミズキと黒髪の少年の写真が登場です。

もしかして、忘れていた方もいるのではないでしょうか？（笑）

では『AS』では今回初めてとなる、キャラのトークです！

ミズキ ⇒ ミ

アーネスト ⇒ ア

リーンベル ⇒ リ

コウ ⇒ コ

次回の後書きからの参考にしてください！

リ「感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです」

コ「え？ なに勝手に終わらせてるのー！？」

第十五話 伸ばしたその手は届かない。(前書き)

今更ですが、縦書きで読んでいただけると、嬉しいです。

第十五話 伸ばしたその手は届かない。

『「瑞姫、瑞姫、瑞姫！」
みずね

彼は手を伸ばす。

「道流、道流、道流！」
みちる

高い声で、彼の名を呼んだ。

「瑞姫・・・！」

「道流・・・！」

お互いに手を伸ばす。

もう少しで、手が届く。

しかし、――――

――二人の手は、触れ合うことはなかった。

聞こえたのは、男の笑い声。

最後に聞こえたのは、悲鳴と銃声。

』

「おい、あんたたち！」

男性から声を掛けられる。辺りが暗いので、顔がよく見えない。

「俺たちか？」

「僕たち以外に、誰がいますか？」

ミズキは呆れたように言った。確かに、周りには、男性とミズキたちの四人しかいなかった。

男性がミズキたちに近づく。ミズキが警戒していないところを見ると、害のある人物ではないのだろう。

「あなたは、昨日の・・・」

事件の目撃者と言われていた男性だった。

「どうかしましたか？」

「いや、自治団体の方に行ってみると、新しい事件が起きたという情報を手に入れた。帰り道だったんだが、ちょうど君を見つけたものだから」

「よく、僕だとわかりましたね？　と言っても、まだ昨日の事でしかたか」

「いや、印象的だったからな。その・・・」

「赤髪ですか？」

「ああ、いや。誤解はしないでほしい。ただ、珍しいと思っただけで、差別的な目を持って見ていたわけではない」

男は大袈裟に顔の前で手を振る。

「大丈夫です。珍しい、ということとは認識しています」

ミズキは口角を少し上げる。男もほっとした様子で、話を続けた。
「その子は、昨日の写真の？」

男はリーンベルを見ながら言った。リーンベルは男に微笑みかける。

「ええ。そうです。ところで事件があったと言っていないませんでしたか？」

「ああ、そうだ。すまない。話が反れていた。・・・昨日の夜中から今日の明け方の間に、男が一人殺された。それはもう残酷な殺され方だった。何しろ体中が穴だらけだったらしいんだ」

ミズキは無言のまま聞いている。アーネストは口を押え、リーンベルは彼の袖を握っていた。

「そう言えば、昨日でまた一週間経っていたんだが、女が血を抜かれて死ぬ事件は、起こらなかったな。あんたたち、解決したのか？」

「いえ、解決はしていません」

ミズキがすぐに答える。「そうか」と男は頷いた。

「そして、もう一つ――」

それは、アーネストが朝ホテルマンに聞いた話と同じものだった。ミズキは今回聞くのが初めてのはずだ。それに事件の話を聞こうとしたのはミズキ自身である。しかし、アーネストには、ミズキがほとんど興味を持っていないように見えた。

はっと目を覚まし、飛び起きる。手に銃を握り辺りを見回す。しかし、そこには規則正しい寝息を立てるリーンベルとアーネスト以

外誰もいない。

「夢か・・・」

額の汗を拭う。

嫌な夢だ。

思い出したくない。

でも、忘れるわけにはいけない。

そんな、過去。

この呪縛から解かれる日は、やってくるのだろうか。

いや、そもそも――――

「――――僕にそんな資格はない」

ミズキはベッドから起き上がり、鞆の中を探る。そして、昨日、夜中に探し回っていたものを取り出した。

それをじっと見つめた後、二人を起こさないようにそっと、リーンベルに近づいた。

何の音だっただろう。

それは最早、確認する術もなく、アーネスト自身、それを確認しようとは思わなかったが、小さな物音で目を覚ました。

目を擦り、リーンベルの方を見る。

真っ暗ではっきりとは見えなかったが、誰かがリーンベルの腕を持ち、何かしているのではないか。

アーネストはすぐに銃を手に取り、その誰かに向ける。

「誰だ。何をしている」

静かな声で言った。できるだけ、相手に動揺を悟られないように、言ったつもりだ。実際には心臓が弾けそうになっていた。

黒い影が立ち上がる。

「動くな！」

厳しい口調で言った。相手から溜息が漏れる。

「僕を忘れましたか？」

影の人物は口を開く。聞き覚えのある声だった。

「ミズキ？」

「そうです。警戒するのはいいですが、ちゃんと状況確認もしてほしいものです」

ミズキはふっと息を吐きながら言った。

「何をしていたんだ？」

「・・・リーネルの体調を確認していました」

「こんなに真っ暗な中で？」

「起こさない方がいいと思ったからです」

そう言うミズキは、手に持っていた何かを鞆にしまう。

「それは？」

「ウエムラに借りている医療器具です」

すぐにベッドの中に入り、アーネストに背を向けた。

しばらくその姿を見ていたアーネストだが、寝息が聞こえてきたので、彼ももう一度寝ることにした。

目を覚ました。

辺りの匂いが変わったからだ。

ミズキはベッドから起き上がる。

既に原因はわかっていた。

彼女はすぐそこに立っていた。

虚ろな目でミズキを見つめている。

ゆっくりと左右に揺れていた。

「足りなかったのか」と舌打ち。

靴を取るために、素早く床を蹴った。だが、それも遅い。

リーネルに背を向けた瞬間。ミズキは背に衝撃を受け、壁に弾き飛ばされた。銃を構え、リーネルに向ける。だがトリガは引けない。そんなことをしては、元も子もなくなってしまう。

威嚇程度に、リーネルの足元に弾丸を放つ。一瞬灯りともし、彼女の目が妖しく光った。

銃声を聞きアーネストが飛びきる。その時には、ミズキは既に壁に押さえつけられた。首を片手で、銃は膝で押さえられており、身動きが取れていない。

「リーネル！」

状況を理解したアーネストが、銃口をリーネルに向ける。だが、それと同時に、「撃つな！」とミズキが苦しそうな表情で叫んだ。その声で、アーネストは危うく引きかけたトリガから指を離す。

ミズキはアーネストを睨み、彼のそれ以上の行動を許さなかった。

仕方なく、銃を構えたまま、固唾を飲んで見守ることにした。

リーネルの顔がゆっくりとミズキに近づく。ミズキには、首で彼女の荒い呼吸が感じられた。彼女の歯が首筋に当たり、一瞬背筋を何かが伝う。そして、徐々に圧力が加わり、首を噛まれているのがわかった。幸い、まだ血は出ていないらしい。

「僕の血を飲みますか、リーンベル？」

ミズキは僅かに動く首を、リーンベルの耳に近づけて、囁いた。

「君が必要としているのは、女、処女の血ではなかったのですか？」
ピクリと動いたリーンベル。動きが止まっていた。

「そう、ミズキさん。あなた、違うのね」

リーンベルが顔をミズキから放し、首を傾げながら、残念そうに
につこりと微笑んだ。

ミズキはその瞬間に、ポケットから素早く何かを取り出し、彼女
の首筋に突き立てた。

「何を！？」

アーネストが叫ぶ。

リーンベルはそのまま横に倒れる。ミズキが、床に倒れ込む直前
の彼女を抱き留め、ベッドに寝かせてやった。

ミズキが手に持っていたものを、アーネストに見せた。

「注射器？」

「ええ、そうです」

「それで何を？」

「血です。女性の・・・」

アーネストの表情が驚愕に染まる。

「なぜ、そんなことを・・・？」

「今のリーンベルとの会話で、わかりませんでしたか？」
軽く息を整える。

「彼女が、一週間ごとに女性の血を抜いて殺していた犯人です」

ミズキは静かに言った。

第十五話 伸ばしたその手は届かない。(後書き)

コ「キャラトーク。この作品やりにくいです・・・」

ア「まともに話せそうなの、俺ぐらいだもんな」

コ「うん・・・」

ア「感想、評価、誤字脱字の指摘、その他作品への意見など寄せていただけると嬉しいです」

第十六話 それはまた、別のお話

『いつの間にか引き込まれてしまった深淵。

足掻いても、そこから逃れることはできない。

彼は気づくのだろうか。

自分の愚かさ、

自分の弱さに。

』

既に息は上がっている。ミズキは外見の通り、力もなければ体力もない。加えて、靴には鉄板を仕込んでいるため、普通の物より重い。体力は限界に近かった。

追手はこちらに来ていだろうか。いや、来てもらわなければ困る。アーネストでは、リーネルを護りながら、戦うことなどできないだろう。まず、彼の場合、人に向かってトリガーを引けるかどうかすら、怪しいものがある。

ミズキは後ろを振り返った。街灯を壊しているせいで、暗くて何も見えない。だが、一瞬何か嫌な気配を感じた。

どうやら、こちらに来てくれたようだ。

意識していないのに、口角が上がる。

さて、この後はどうしたものか。

街の中を駆けながら、思考を巡らした。このまま、逃げ回っていても埒が明かない。相手がリンベルを狙っているのなら、ずっと危険が付きまとうことになる。それならば、いつその事、ここで迎え撃った方がいかもしれないと思った。

ミズキは街灯を壊すのを止めて、自ら姿を晒した。

振り返り、暗闇に向かって銃を構える。吸い込まれそうな闇だった。

足音が聞こえていた。

「おや。君だけしかないとは。してやられた、ということか・・・」

男の声。

ミズキは地面に向けて一発、銃を撃った。

「銃を下ろせ。君とやり合うつもりはない」

「姿を見せてください」

「わかった。今から、そちらに出よう」

驚くほど落ち着いた声だった。先ほどの嫌な感じもなくなった。どうやら嘘ではないらしい。ミズキを殺すのであれば、黙って闇に潜んだまま、トリガーを引けばいいのだから。

足音が徐々に近づいてくる。ミズキは暗闇を睨んだまま、じっとしていた。

「そう怖い顔をしない方がいい。可愛い顔が台無しだ」

姿を現したのは、背が高く非常に上品な身なりをした男だった。

片手には拳銃を持っているが、その手は下ろされたままだった。

銃口をこちらに向ける気配もなかったので、ミズキも銃を下ろすことにした。

「僕は男です」

ミズキは男を睨んだまま言った。

「これは失敬。だが、女性だ、とも言っていないのだが」

ミズキの眉がピクリと上がった。反射的に銃を構えようとしたが、何とかそれをこらえる。それが分かったらしく、男は楽しそうに笑った。耳に着く、嫌な笑い声だった。上品なのは身なりだけか、とミズキは溜息をつく。

「なぜ、姿を現したのですか？」

「それは既に分かっているのでは？」

「目的はリーンベル・ローズヴェルトですか？」

また、嫌な笑い声。どうやら、イエスと言っているようだ。

「そう。確かに、彼女が俺の目的だ。だが、君とは内容が違うみたいだけだな」

ミズキは眉をひそめた。

「リーンベルを殺そうとする理由は？」

「殺す？」

男は高笑いした。どこまでも、耳に着く、嫌な笑いだ。いい加減、ミズキもうんざりしていた。

「俺は彼女を殺そうとは思っていない」

「・・・どういう意味ですか？」

「彼女の邪魔者を、排除するように命じられているのだよ」

「それはどういう」

「そのままの意味だ。彼女の封印書、だったかな？　その手助けをしろと、言われていたんだ」

どこか、引っかかる言い方だった。すぐに気が付いたミズキは「過去形ですか？」と返した。

「もう解雇されてしまった」

大げさに肩をすくめ、溜息をつく男。

「解雇された人間が、なぜリーンベルを？」

「個人的に、彼女に興味があったのだよ。特に、一週間に一度、女の血を飲むところとか」

「やはり、あの事件はリーンベルが起こした物でしたか。それに、飲んでいたとは・・・」

しかし、ミズキにはこの男がリーネルを追っている理由が、それだけではないような気がしていた。男の目を見ればなんとなく、それが伝わってくる。彼はリーネルに魅せられているのではないだろうか。

ミズキも経験したことがある、リーネルの不思議な魅力。写真だけで吸い寄せられそうになったことを覚えている。

「君はなぜ、リーネルを？ 目的は一体？」

「僕は依頼で、リーネルを探すように頼まれていただけです」

「なるほど、バウンティ・ハンターと言うやつか」

「便利屋です」

すかさず訂正する。

「依頼主は？」

「僕が言うと思いますか？」

「俺は、国王とジョセフという老人に頼まれていた」

一瞬、ミズキの目が揺れる。男はそれを見逃さなかった。

「どうやら、聞き覚えがあるようだな。それとも、依頼主が同じだったか？」

動揺を隠したつもりだったが、見抜かれてしまう。ミズキは聞こえないように舌打ちした。

「そうです。僕もジョセフから依頼を受けました」

ポケットの煙草を取り出し、火を点けた後に、ミズキは言った。

「リーネルはなぜ血を飲む必要があるのですか？」

煙を吐き出す。

「なんだ、聞かされていないのか？」

「何を？」

「血を飲む理由。それは体の機能を維持するためだと聞いている」

「体の機能を維持？ 彼女は一体・・・？」

「本当に何も聞かされていないようだな」

男は溜息にも似た笑い声を出した。

「彼女は三十年ほど前に、ある実験で生み出された人造人間だ。歳

も取らない。何の目的があつて作られたのかは、わからないがな」

人造人間^{ホームンクルス}。その言葉にミズキは自分の耳を疑った。

そんな物が存在するのか。一体どうやって。いや、ウエムラほどの頭脳を持った科学者が何人か集まれば、可能なかもしれない・・。

思考を巡らしていると、男が小さな声で笑った。

「その顔は、信じられない、という顔かな？」

その通りだった。実際にまだ、信じられない。

「俺も最初は信じられなかった。だが、彼女の容姿は、俺が初めて見た時からずっと変わっていない。それに写真も見たことがある。十年以上も前の物だ」

「信じるしか、ないようですね・・・」

男の言葉は、嘘のようにには感じられなかった。

「リーンベルに興味があると言いましたね。ではなぜ、あなたはリーンベルが血を飲む邪魔をしたんですか？」

「彼女がどうなるか、見てみたかった。結局、君に阻まれてしまったけど」

「純粹な興味？」

「ああ。その通り」

「ならば、どうです。ご一緒に？」

「どうということだ？」

「僕たちと一緒に来れば、こそこそとする必要はない」

思考を巡らせた結果だった。リーンベルが人造人間^{ホームンクルス}だろうと、ミズキには関係ない。理由がどうあれ、ジョセフの所へ連れて行けばよいのだ。

この男を放置しても、また何かされかねない。それならば、リーンベルの安全を守るために、この男を利用する。そして、もし何か危険なことをしようとすれば、その時点で排除してしまえばいい。

それに、この男が国王と通じていたのであれば、それを利用して、第二王子への復讐を果たすこともできるかもしれない。

「なるほど、なかなかいい提案だ。俺はサイラス・マグリ。君は？
正直、これほど素直に話に乗ってくるとは思っていなかったミズ
キは、少し動揺した。」

二人でホテルに戻っている時だった。不意にサイラスが口を開く。

「ところで、その赤髪。君は魔女かい？」

その言葉に、ミズキの足が止まった。『魔女』という言葉に、憎
悪にも似た感情が、吹き出しそうになる。

「男でも、『魔女』と呼ぶのは不思議だがね……。この国で魔女
がいない理由は知っているよ。数年前に、魔女狩りが行われただろ
う？ 村を一つ、壊滅させたはずだ。俺も、その部隊に所属して
いた。部隊を率いていたのは、この国の第二王子だったが、ジョセ
フはその時の指揮官だったかな？」

指の間に挟んでいた煙草が、ぽとりと地面に落ちた。

「あれはよかった。女子供の悲鳴が——」

振り向きざまに、サイラスの足に向けて一発、銃を撃った。至近
距離から撃った弾丸は外れるはずもなく、彼の左の太ももに命中す
る。

「お前も、あの場にいたのか・・・？」

太ももを撃たれた痛みで、地面を転がりながら叫び声を上げるサ
イラス。ミズキは冷たい目で彼を見下ろしながら聞いた。

「畜生！ 魔女め！」

サイラスは銃を取り出そうとする。その手をミズキが撃った。サイラスの手ははじけ飛び、指がなくなる。また叫び声を上げた。「魔女め！　魔女め！　殺してやる！　魔女狩りの時のように！」呪詛の言葉が、ミズキに向かって吐かれる。それが急に恐ろしくなり、ミズキはまた、トリガーを引いていた。

トリガーを引き続けた。何度も、何度も何度も何度も。

サイラスがもう息をしていないことなど、お構いなしだった。とにかく、この男が生きていた、存在していた、という事実すべてを消し去りたかった。そのためにまず、肉体を消してしまおうと考えている様だった。

一発。もう一発と、弾丸がサイラスに当たるたびに、ビクンビクンと体を痙攣させている。ミズキにはそれが恐ろしくてたまらなかった。起き上がってまた、あの呪詛に満ちた言葉を、自分に向けてはなっていくのではないかと思えて、仕方がなかった。

弾倉マガジンの弾が尽きても、すぐにリロードを行い、絶やす間もなく次弾を撃ち続ける。腕が徐々に痺れてきており、照準が定まっていなかった。数発に一発がサイラスに当たらず、地面に当たっていた。

それでも、ミズキは撃ち続けることを止めなかった。

最後の弾を撃ち終わった時、そこはあまりにも酷い惨状が広がっていた。既に誰だかわからないほど、穴が開いたサイラス。男か女かすらわからないほど、死体は損傷している。大量の返り血がミズキに付着していた。

いつの間にか、息遣いが荒くなっている。

「ちくしょう・・・！」

一人、地面に膝をつき、闇に向かって呟いた。

ふらりと立ち上がったミズキは、顔についた返り血を拭った。

既に感情のコントロールは終わっている。

まだ、やらねばならないことがある。

リーンベルに血が必要だと言うことはわかった。その血を集めなければならぬ。

それに、ジョセフ。あの男が国につながっているとは思ひもしなかった。それに、魔女狩りの当事者だったとは。

サイラスを殺してしまった今、ジョセフを利用して、第二王子に近づくことはできないかと考える。もちろん、その後にジョセフも殺してしまわなければならない。

気が付けば涙が流れている。それでも、ミズキにはただの水分が、目から流れているだけのように入れた。

ミズキは闇の中、おぼつかない足取りで歩き始めた。

明け方になると、そこら中の家に明かりがともった。

どういふことだ、と疲れで鈍った頭を回転させた。恐らく、今までの事件が深夜に起こっていたから、明け方ならば危険はないと、判断しているのだろう。

安易な考えだ、とミズキは口を緩める。

ここにも一人、犯罪者がいるというのに・・・。

まだ、それほど明るくはない。顔を見分けるには、かなり近づかなければわからないだろう。

物陰に隠れ、息を潜める。

寒さで指がかじかんできた。今までは、そんなこと、少しも気にならなかったのに。きつと、緊張から解放されたからだろう。

手に息を吐き、擦り合わせる。ポケットから手袋を取り出し、それを両手にはめた。

玄関のドアが開き、女性が顔を覗かせる。辺りを何度か確認して、外に誰もいないのがわかると、女性は家の外に出てきた。

暗くてよくわからなかったのだが、女性、というのは少し違うかもしれない。まだ、少女と言った方がいいだろう。

後ろからそっと近づいたミズキは、薬物を含ませたハンカチを女性の口に当てた。

一瞬うめき声を上げた女性は、すぐに体の力が抜けたように、その場に倒れた。女性を床に寝かせたミズキは、ポケットから注射器を取り出す。

まさか、ウエムラから借りていた物が、こんなところで役に立つとは、思ってもみなかった。

「少しだけ、もううよ」

彼は少しだけ微笑みながら言った。

第十六話 それはまた、別のお話（後書き）

すみません。

今回、上手くまとまっていけないです。

おかしなところがあれば、意見を寄せていただければ、

随時修正していきたいと思います。

あと、物語には影響しない程度の、加筆修正もするかもしれません。
修正した後は活動報告を書くので、よかったら覗いてみてください。

第十七話 言わなくてもわかること、聞かなければわからないこと

『「瑞姫^{ミズキ}…」

「なに、道流^{ミチル}？」

二人は微笑みあった。

続きを喋ろうとした道流を、瑞姫の手が止めた。

「しーっ…」

瑞姫が口の前に人差し指を立てる。

「口に出さなくても、わかってる」

道流が何を言おうとしたのか、

瑞姫にはわかっていた。

』

「その後、他にも数人、血をいただきました」

あれから大人しく寝ているリーネルの頭を、ミズキはそつと撫でた。

「彼女は僕たちが思っているような子ではなかった」と息を吐きながら言う。

「どうです。納得しましたか？」

肩を震わせながら聞いているアーネストに、ミズキは声をかけた。部屋の電気は点いておらず、彼は俯いているので、表情は読み取れない。アーネストは、リーネルをちらりと見て、立ち上がった。

「何が、納得しましたか、だ。澄ました顔して。自分が何をやったか、わかっているのか」

厳しい表情でミズキを見下ろす。だが、ミズキは無表情のまま、アーネストを見つめ返していた。

「君は何に怒ってるんですか？」

「罪のない人を、傷つけたことだ」

溜息を吐き、アーネストを見る。

「僕は目的を果たすために手段を選ぶつもりはありません」

「お前……！」

「言ったはずです。優先順位を考えろ、と」

アーネストは、ミズキの襟を掴み、壁に押し付けた。初めてであった日のように、ミズキは一切抵抗しなかった。

「突然どうしました？」

いきなりつかみかかったにも関わらず、ミズキは至って冷静だった。まるで、この状況を予想しているかのようなだった。

「お前を自治団体に引き渡す」

襟をつかんだ手に力を入れるアーネストだったが、首に当てられた冷たい感触に、動きが止まった。ミズキが、僅かに動く手で、銃を突きつけているのだった。

「いいえ。それはできない相談です」

その声は氷の棘となり、アーネストに刺さった。

「僕の邪魔をするなら、ここで死んでもらいます」

ミズキが本気だということを伝えるには、アーネストの目を見るだけで十分だった。

「言っておきますよ。僕は、君を仲間だとか、友人だと思ったことは、一度もありません」

「じゃあ、なぜ俺を連れてきた」

苦し紛れに、呟く。

「役に立つと思ったからです。でも、それもこれで終わりです。僕はここで歩みを止めるわけにはいかない。僕の目的、話したことあるでしょう？」

帰ってきた答えは、冷たい答えだった。答え自体も冷たかったが、ミズキの言葉、いや、ミズキ自身が冷たかったのかもしれない。アーネストは、ミズキに対して、これまでに感じたことのない恐怖を感じた。

「どうしてそんなに、復讐にこだわる？」

「答えは簡単だ。僕は君じゃない。ただ、それだけだ」

「そんなの、答えになっていない！ ミズキ、そんなに復讐が大切か？」

声を荒げ、アーネストは銃を突きつけられていることも構わず、さらに力を込めミズキを押さえつける。

「君に、僕の何がわかる！」

ミズキは、アーネストの首に突きつけた銃をさらに、押しつけた。

「すべてを奪われた、僕の、なにがわかるというんだ、アーネスト！」

静かに、しかしこれまでにない怒りのこもった強い口調に、アーネストは一瞬身を引いてしまった。その隙を見逃さず、ミズキは、アーネストの腹を銃で殴りつける。不意を突かれたアーネストは、膝を折り咳き込んだ。

銃をしまったミズキは、アーネストを見下ろした。

「それに、僕が女性を襲って、血を集めておかなければ、リーンベ

ルは一週間に一人、人を殺すんですよ？　僕がした行為は、彼女に人を殺させずに済んだ。十分でしょう」

「どうして、こんな子どもが！」

床を叩き、アーネストは小さくつぶやく。

「さっきの話をちゃんと聞いていましたか？　彼女、子どもなんかじゃありませんよ」

「なに？」

「気になるなら、聞いてみればいい」

ミズキは服の乱れを整えながら続ける。

「ミズキさん？」

二人が声のした方を見ると、リーネルが眠たそうに目を擦っていた。

「大丈夫です。ゆっくり寝ていなさい」

ミズキがリーネルに優しく声をかける。すると、彼女はすぐに安らかな寝息を立てて、また眠りについた。アーネストにはどこからどう見ても、彼女が少女にしか見えない。

「アーネスト。君も、早く寝るといい。――明日になったら、君は家に帰りなさい。やはり、君には向いていない」

そう言うと、ミズキは自分のベッドに潜り込んでしまった。ミズキから言われた、言葉に混乱したまま、アーネストは眠りについた。

「おはよう、アーネスト。家に帰る準備はできましたか？」

先に起きて、ベッドに腰掛けていたアーネストに、ミズキは声をかけた。ぴくりと動いたアーネストを鼻で笑う。

「俺は帰らない」

「へえ…」とミズキは驚いたふりをした。馬鹿にしているようにも見える。だが、アーネストを拒絶しようとはしなかった。まるで、アーネストが、着いて来ようとすることを知っていたかのようだ。

「止めないのか？」とアーネスト。

「止めても、どうせ付いて来るんでしょ？」

ミズキは窓の外を眺めながら言った。煙草でも吸いたそうな表情だ。

「おはよう、リーンベル」

「おはよう、ミズキさん」

二人はお互いに笑顔で挨拶を交わした。二人の笑顔はどこか似たところがある。それが一体なんなのか、アーネストにはわからなかった。

「リーンベル、少し事情が変わりました。僕たちには猶予があまり残されていません。わかりますね？」

「ええ、昨日の事でしよう」

黙ったままミズキは頷いた。

「あと、十日分しか残っていません」

「十分だわ。帰りは一瞬ですもの」

その言葉に、ミズキとアーネストはお互いに顔を見合わせる。リーンベルの言葉の意味が全くわからなかったのだ。それに気が付いたリーンベルは、くすりと悪戯っぽく笑う。

「また、後でお話します」

「あ、ええ、わかりました」

ミズキは戸惑いながらも返事をした。

「リーンベル…」

「どうしましたか、アーネストさん。後でお話する、と言いましたよ？」

「そのことではないんだ」と一度、口を噤んだ。

「歳は、いくつなんだ？」

「まあ…！」

口に手を当て、リーネルは大袈裟に驚いて見せる。それを見たアーネストは、一瞬どきりとした。

「女性に年齢を聞くななんて、マナー違反じゃなくって？」

「いや、俺じゃない。ミズキが聞けと」

「そうなんですか？」

口を膨らませながら、ミズキを睨んだ。

「僕は、気になるなら、と言っただけです。僕が、聞け、と言ったわけではありません。アーネストの意思ですよ」

「ああ、やっぱり」

くるとアーネストの方を向いた。

「別にかまいませんけどね」

ほっと息をついたアーネスト。

「私、52歳です」

「え、今なんて…？」

アーネストは、驚いてリーネルに詰め寄る。その様子を笑いながらミズキは眺めていた。

「私、52歳です」

まるで録音したテープの様に、リーネルは同じ調子で繰り返した。

「俺より年上。三十以上も…？」

「ええ」

彼女は頬に手を当て、首を傾げた。

第十八話 魔女の泣声

「そういえば、どうして、そんな子供のような仕草ばかり」

「それは、ほら、年相応の言葉づかいや物の言い方をしていると、反感を買ってしまうといけませんから。生意氣と、言われるかもしれないでしょう？ それに、外見通りに振る舞えば、相手も優しくしてくれます」

そう言いながら、リーンベルはアーネストに近づいた。そして、耳元でそっと「貴方みたいに」と囁いた。耳を押さえながら、アーネストは後ずさりする。

「ミズキ。知っていたのか？」

「何となく、そんな気はしていましたよ。まず、彼女が白黒写真に写っていた時点で、気が付かない君もどうかと思う。一体何年前だと思っているんですか？」

「何で、言ってくれなかったんだ」

アーネストは顔を赤らめる。

「気づいている物だと思っていました。それに、君が気づいていなくとも、依頼を達成させるうえで全く、何の障害にもなりません」

ミズキは先頭を歩いている。煙草を吸いながら、後ろにいる二人を見ずに言った。

「僕はリーンベルを連れて行くだけでいいのですから。別に貴女がどんな人物であろうと、人ですらなかつたら、僕には関係ない」

その言葉に、リーンベルは俯いて、足を止めた。同時にアーネストも足を止めたが、ミズキは気が付かずに、歩いき続ける。

「ミズキ。その言い方はないだろう」

ミズキは振り返り、俯いたままのリーンベルを見た。彼女は少し唇を噛んで、頬を膨らませていた。恐らく、この仕草も、長年同じ姿で生きてきた功、という物だろう。少女の仕草であって、女性の

仕草には見えない。正直、彼女が52歳だとは思いたくなかった。

「いいえ。いいの。私、ミズキさんのドライな所、好きよ」

膨らませた顔を、すっと笑顔に変える。速い。とても速い変化。切り替えと言った方がいいだろうか。

「僕、そんなに渴いていますか？」

ジョークのつもりだった。

「ええ、渴ききっているわ。少量の水なんか、無意味でしょうね」

笑顔のまま言うリーンベルに、ミズキは驚き、目を見開いた。そして、小さく舌打ちすると、また前を向いて歩き始める。その後ろをリーンベルが小走りで追いかけていく。彼女が走るたびに、綺麗に伸ばした金髪が揺れていた。

「貴方を潤せるとしたら、誰か、愛すべき人が必要かしら？」

「いえ、必要ありません」

「え、どうして？」

「もう、僕の渴きは、誰にも潤せるものではないから」

手の上で、淡い青色に光る石を転がしながら、空を見上げるアーネスト。彼の持っている石が、リーンベルの探している鉱石だった。こんなちっぽけな石が、自分たちを、この街に五日も引き留めていたと考えると、可笑しくて仕方がない。いや、本来ならば、笑っていられるような状況ではなかった。

ミズキが準備していた血は、残り五日分しか残っていない。ここからミズキの街へ戻るのに、最短ルートを進んだところで、五日以上かかるのだ。依頼の期限までまだ時間があると言ったところで、リーンベルの身体に危険が及ぶ。そうならないためには、新しい血を採取する必要があるのだ。

アーネストはそれに反対だった。ミズキは目的のために手段を選ばないと、そう言ったが、彼にそんなことをさせたくなかった。

「そもそも、なぜ、血を飲む必要が？」

「別に、飲まなかったっていいのよ。身体の中に取り込めば、それでいい。ミズキさんがやったみたいに……。理由は、残念だけれど、私もわからない。ただ、血がないと、駄目みたいね。禁断症状というやつかしら？」

彼女は、ミズキの質問に答え、少し離れた場所に座っているアーネストの方を見た。

「私だって、好きでこんなことをしている訳では、ないのよ」目がゆっくりと伏せられる。「でも、生きるためには、仕方がないことだってあるわ」

一瞬、目が合ったが、アーネストはすぐに、彼女から目を離れた。心を読まれたような気分で、居心地が悪かった。

「少しの間、我慢するということはできませんか？」

「残念だけれど、それはできません。私だって、今までずっと耐えてきた」

ミズキは顎に手を当てて、低く唸った。しばらくして、何かに気づいたように、空を見る。だが、あまりいい表情とは、言えなかった。

「あの、リーンベル……」

「なあに？」

少し、躊躇いながらも、言葉が続ける。

「鉱山へ行く前に、帰りは一瞬、と言っていましたよね？」

「ええ、言いました」

「それは一体、どういう？」

「ミズキさん、貴方、魔女でしょう？」

その言葉に、ほんの少しだけ、ミズキの眉が上がる。振り返ったミズキは、煙草を地面に捨てて、靴底で火を揉み消した。リーンベルを正面に捉え、その目を見返す。

「僕は、魔女では……いいえ。そうです。僕は、魔女です」一度、否定しかけたが、ミズキはそのまま続けた。「でも、それは伝承で

あって、差別用語です。今、その言葉には、何の意味もありません」
「差別用語。ええ、その通りね。赤髪は魔女の証。獣との混血。災
いをもたらす者として、昔はずいぶん酷い差別があったわ」

「理解できない現象を、魔女のせいだと決めつけ、その者達を生贄
にする。そうすることで、行き場のない怒りや悲しみに、行き場を
作る。身分の低い者たちに、自分より下がいると思わせた。魔女は、
そんな馬鹿げた政策の一環に過ぎない」

二人は、お互いに向かい合い、静かな口調で言った。

「でもね、ミズキさん。それだけではないのよ」

「言っている意味が、わかりません」

ミズキがそう言うのと、リーネルはミズキの目の前に、人差し指
を立てた。

「煙草をくわえて」

「え？」

「言った通り。煙草をくわえてください」

言われるままに、煙草をくわえる。

「そのまま、私の人差し指に近づけて」

そして、数秒。

リーネルの人差し指から、小さな炎が上がり、ミズキの煙草に
火を点けた。

驚き、一度身を引きかけたミズキだが、いつもの様に煙を吐き、
リーネルを見つめる。

「私にも、魔女の血が流れているの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6767v/>

ANOTHER SKY

2011年10月29日03時10分発行